

42039

教科書文庫

4
810
41-1941
200030
2247

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

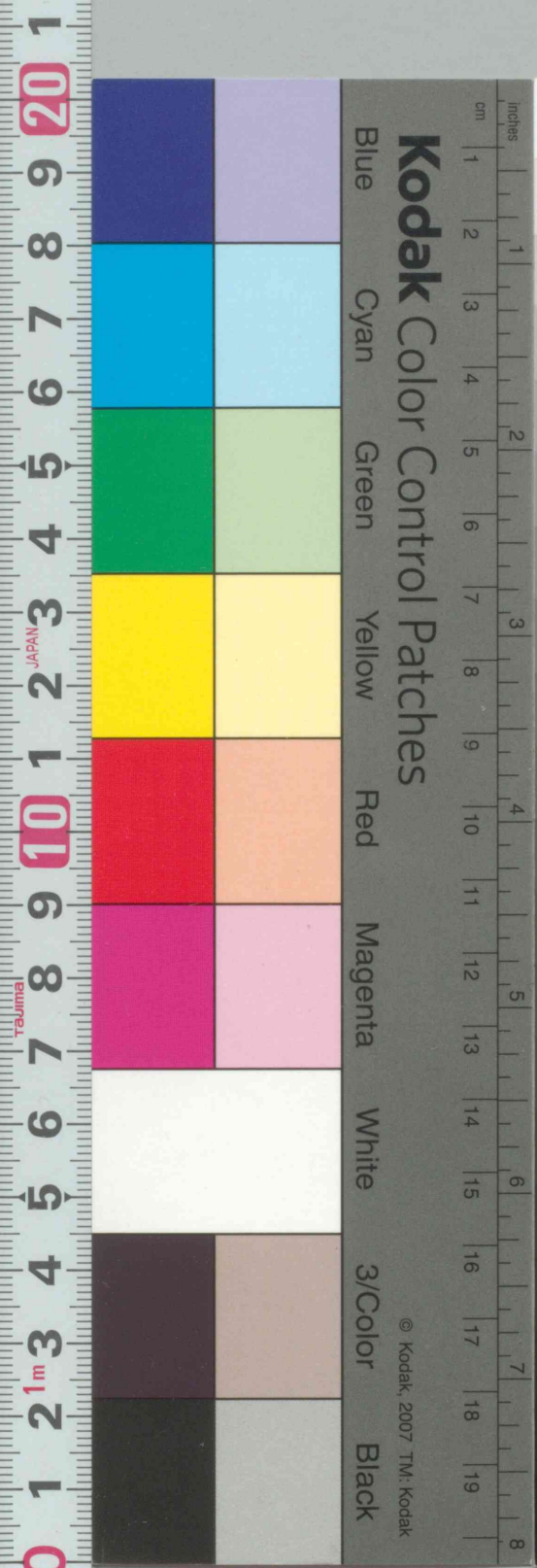


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

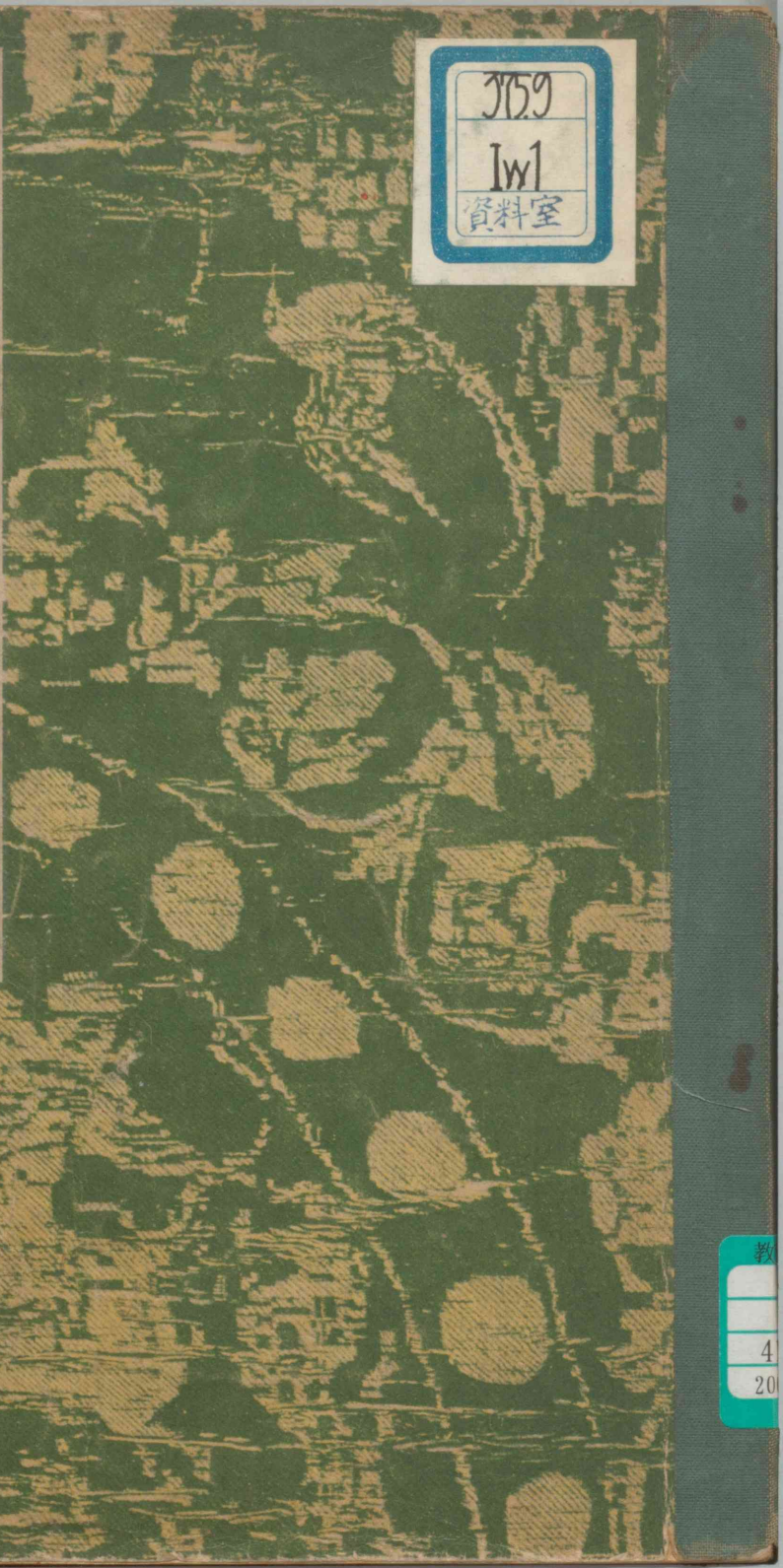
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759  
Iw1  
資料室

國語 卷一



日一十二月一十年六十和昭  
濟定檢省部文  
用科文漢語國校學中

教科書文庫  
4  
810  
41-1941  
2000302247

# 國語

岩波編輯部編

改訂版

中等學校教科書株式會社

広島大学図書

2000302247



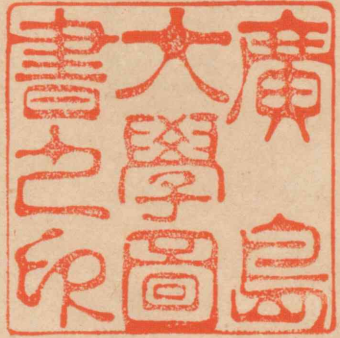
資料室

3709  
Iw1

筆齋北飾葛



雨白下山 景六十三 蕨富



國語 卷一 目次

一	生きた言葉	一
二	櫻	七
三	曙の富士	三
四	明治天皇御製	六
五	春の使者	九
六	峠の茶屋	六
七	詩二篇	六

生長

海

八山寺

九松

一〇 八丈島行幸

一一 蜘蛛の絲

一二 屋根

一三 水泳

一四 莓と茱萸

一五 上高地

二

三

四

五

六

七

八

九

一〇

一一

一六 空の色

一七 湖畔

霧

道

一八 ポチ

一九 良寛さま

二〇 かるさんと米

二一 用水

二二 藤樹先生

二三 立志

岡田武松……九

杉村楚人冠……一〇五

……一〇五

……一〇九

長谷川二葉亭……二一

北原白秋……二三

島木赤彦……二七

(遺老物語)……二五

橘南谿……一四〇

橋本左内……一四

二四 野口博士の少年時代 ..... 一五

二五 科學的日本人 ..... 吉村多彦 ..... 一七



國語 卷一

一 生きた言葉

四月初のある朝私はいつものやうに電車から降りて、春らしい陽ざしを楽しみながら、ゆつくり學校の方へ歩いて行つた。

途中、公園の櫻並木を通り越して舗装道路にさしかかつた頃、一人の生徒が私の傍らを急ぎ足で通り過ぎた。後姿を見ると、まだ制服もま新しい、入學したばかりか。

りの生徒である。間もなくまた私の背後から來た生徒が私を追ひ越さうとして、「お早うございます」と挨拶した。見ると五年生の一人である。すると、さきに私を追ひ越した新入生が、何を思つたか急に立止り、道の左側に直立してゐる。私が近づくと、脱帽して、「お早うございます」といふ。私も「お早う」と挨拶を返した。すると、私の聲の終るか終らない中に、彼は再び語を發して、「先生、私はさつき先生だといふことを知りませんでした」といつて頭を下げた。「あゝ、さう」といひながら、思はず私も頭を下げた。

先生に對し、學友に對し、必ずはつきり言葉に出して

挨拶せよとは學校の平素の教育である。この新入生も、早速この教育を受けたのであらう。そして、一人の先生に對してその禮を缺いたと氣づいた時、直ちにその氣づいた場所に立止つて待ち受け、挨拶を果し、さきの缺禮を謝したものとみえる。

考へてみると、誠に羨ましい行動である。誰でも、自分のしたことが誤つてゐたと氣づいた時、これ程こだはりなくその非を認め、これ程はつきりとその非を改めることが出來たなら、自他共にどんなに幸福になるであらうか。私は明るくされた心持で學校の門を入つた。

その後も、私は時々このことを思ひ出す。そしてあの少年の一途な顔とはりきつた聲とを、あり／＼と見聞くやうに感じるとともに、先生だといふことを知りませんでしたといふ、本氣な言葉を思ひ返さずにはゐられない。

實際、かういふ眞實な言葉は、不思議に人の心を明るくするものである。あの良寛が座右の銘にしてゐたといふ「愛語」の中に、

むかひて愛語をきくは、おもてをよろこばしめ、こころをたのしくす。むかはずして愛語をきくは、肝に銘じ、魂に銘ず。

良寛  
禪僧  
歌人  
越後國（新潟縣）の人  
天保二年（二四九一）歿  
年七十四

愛語  
道元禪師の正法眼藏菩提薩埵四攝法の一節

といつて愛語の力を讃へ、更に進んで、愛語することによつて愛心を拓くことが出来るといふ意味のことをいつてあるのも思ひ合はされる。かく、聞く人の心を明るくし、言ふ人の心を拓くやうな言葉こそ、眞に生きた言葉であるといつてよいであらう。そして、この生きた言葉を實現しゆくことによつて、やがては、同じ「愛語」の中の、「愛語よく廻天の力あることを學すべきなり」といふ言葉の意味をも、本當に會得することが出来るやうになるであらう。

國語の學習に於ては、いろ／＼な文を読み、又いろいろな文を綴る。しかし、それに止つて、我々自身の日常



の言葉を疎かにしたならば、その學習は、畢竟根のない植物を育てようとするやうなもので、眞の國語の力を成長させることにはならないであらう。

我々は、我々の心を育てることによつて、我々の言葉を力あるものにしなくてはならないのはいふまでもないが、また、日々刻々の言葉を生きた言葉にすることによつて、心を拓き、いのちを向上させてゆかなくてはならない。そして、それが眞に文を讀み、文を綴るための缺くべからざる基礎であることをも覺らなくてはならぬ。

二 櫻

芳賀 矢一

芳賀矢一  
國文學者  
文學博士  
東京帝國大學  
教授  
帝國學士院會  
員  
福井市の人  
昭和二年卒  
年六十一

梅といひ、牡丹といひ、芍藥といひ、菊といひ、花の名には漢字音そのまゝのものが少くない。これらの多くは、支那の文明と共に日本に渡來したものであらう。また、コスモスといひ、パンジーといひ、ベコニヤといひ、アネモネといひ、チュールリップといひ、西洋渡來の草花も近來は色々ある。どれも、美しく愛らしいものであるが、やはり、我々日本人が國花として世界に誇るに足るものは櫻であらう。爛漫と咲き亂れた櫻花の、山を埋め谷に滿ち、雲とまがひ雪とまがふ景色は、日本

色  
辨  
咲時感

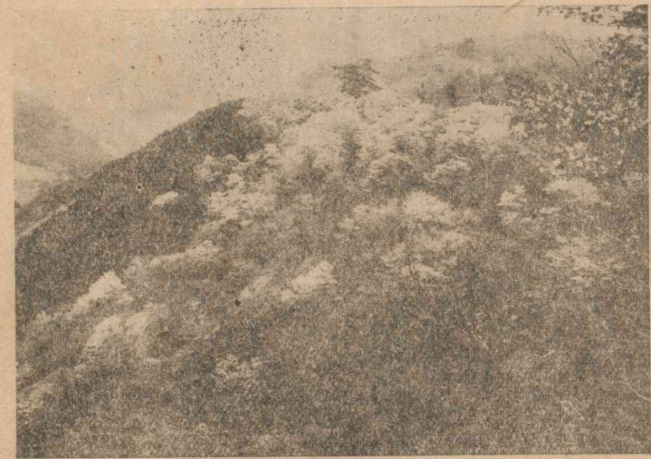


三 里 深 の 櫻

固有の美景である。  
櫻の花の色は極めて  
あつさりとしてゐる。  
しかし純白ではない。  
いはゆる櫻色である。  
その瓣は極めて薄い。  
一樹に無数の花を著け  
て、咲く時は一時に爛漫  
と残りなく咲く。上品  
な大宮人の風もあり、楚  
楚たる野趣も添はつて

空に知られぬ雪  
櫻ちる木の下  
風は寒からで  
空に知られぬ  
雪ぞ降りける  
(拾遺集)

ある。空青く水清い日本の風土に最もよく釣合つて、  
深山・都市、どこにあつても  
よい。二十日草の長い盛  
りもなく、薔薇の高い香氣  
もないが、空に知られぬ雪  
と降り散つては、一段の風  
趣、再び世界を花の中に包  
んでしまふのである。日  
本の花の中の花は櫻であ  
る。



吉 野 山 の 櫻

櫻の咲くのは春の半ばである。春の日本は水蒸氣

照りもせず云々  
照りもせず曇  
りもはてぬ春  
の夜の朧月夜  
にしくものぞ  
なき  
(新古今集)

賀茂眞淵  
國學者 歌人  
遠江國(静岡  
縣)の人  
明和六年(二  
四二九)歿  
年七十三

が多い。どんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない花曇、照りもせず曇りもせぬ朧月夜、雲霞とまがふ花には最もふさはしい景色である。そよ／＼と面を吹くや春風、春の特色はどこまでも、駘蕩たる點にあり、溫和な所により、峻嚴猛烈といふ心の微塵もない所にある。櫻はこの時候にはぐくまれて咲き出でる花である。際立つた特色のない所が即ちその特色である。賀茂眞淵は  
うらうらとのどけき春の心より匂ひ出  
でたる山櫻花  
といつた。春の日は永い。

久方の歌  
紀友則

百敷の歌  
新古今集

吉野山の歌  
八田知紀  
吉野山  
奈良縣吉野郡  
の南部に横た  
はる大峯山脈  
の一支脈

久方の光のどけき春の日にしづ心なく  
花の散るらむ  
櫻は永陽の日に最もふさはしい花である。こゝに大宮人の悠揚迫らぬ様子が想ひやられる。百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざして今日もくらしつて今日もくらしつて  
牛車ぎうしゃの歩みおそく、花見てかへる黄昏の景、さながらの繪巻物である。  
吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限り  
は櫻なりけり  
これは満山花に包まれた吉野山の景色である。

花の雲の句  
松尾芭蕉

上野

東叡山寛永寺  
の寺界

淺草

金龍山淺草寺  
の寺界

鐘一つ云々

鐘一つ賣れぬ  
日はなし江戸  
の春

(榎本其角)

花の雲鐘は上野か淺草か

これは鐘一つ賣れぬ日もなき大都會の花に掩はれた  
光景である。櫻は牡丹や薔薇のやうに花瓣を賞翫す  
る花ではなくして、木として賞翫する花である。否、多  
くの木を集めて、人は唯花中に在つて賞翫する花であ  
る。上から見て愛でる花ではなくして、下から眺めて  
愛でる花である。春風四月、日本人はしばし花の世界  
の人となるのである。

(月雪花)

小泉八雲  
ラフカヂオ、  
ハーン

文學者

東京帝國大學

講師

イギリス人

後日本に歸化

明治三十七年

歿 年五十五

三 曙の富士

小泉 八雲

日の出の少し前、雲のない四月の朝の透きとほる暗  
さをすかして、彼は再び故國の山々を見た。黒い海の  
上に紫紺色に聳え立つ、遠く高い連山を見た。彼を長  
い異郷の旅から連れ歸りつゝあつた汽船の後方では、  
水平線が徐々に薔薇色の光で染められていつた。甲  
板の上には既に若干の外人が、太平洋上の曙の富士の  
又なく美はしい姿を見ようと待ち構へてゐた。  
彼等は長い山脈のうねりを見つめた。そのぎざぎ  
ざした連峯の彼方の深い夜を覗いた。そこにはまだ

星が微かに瞬いてゐた。——しかし富士の姿はどこにもない。

その時一人の船員が叫んだ。

「あゝ、あなた方は眼のつけ所が低過ぎます！もつと高い所を御覽なさい、もつと高い所を！」と。

彼等は高くく、空の真中近くまで眼を上げた。その刹那、曙の色で幻の蓮華の蒼のやうに淡紅く染まつた偉大な山頂が眼に入つた。その壯觀に彼等は沈黙してしまつた。太陽の光線が地球の圓みを越



え、暗い山脈を越え、一見、星までも越えて山頂に達すると、萬年の雪は見るく黄金色に變り、白色に變る。夜は明けはなれた。柔らかな青い光が一天に漲り、總べての色彩は眠から覺めた。人々の眼前には明るい横濱の港が開けてきた。そして、麓の見えぬ神々しい峯が唯一つ、雪の精のやうに大空に高く懸つてゐた。長い旅路の後に再び故國の土を踏まうとしてゐる彼の耳には、先刻の「あゝ、眼のつけ所が低過ぎる！もつと高い所を……」もつと高い所を！といふ叫が、胸の中にむくくと押上げて來る情緒に伴なつて、一種の節奏をなしてまだ繰返されてゐた。

(心)

明治天皇  
御諱は睦仁  
第百二十二代  
御在位二五二  
七―二五七二  
年  
明治四十五年  
崩御 寶算六  
十一

四 明治天皇御製

富士のねもはるかに見えてあしたづの  
たちまふ空ぞのどけかりける

九重の庭木のさくらさきにけり野山の  
春もさかりなるらむ

高殿の窓てふまどをあけさせてよもの  
櫻のさかりをぞみる

春雨のふる日しづけき庭の面にひとり  
みだれてちる櫻かな

池水にちりうく花のかたよりてひれふ  
る鯉のかげも見えつつ

乗る駒に小草はませてやすらへば鞍の  
うへ白く花ちりかかる

殿もりのゆききに馴れてわが庭の池の  
水鳥たたむともせぬ

春雨にみどりはそひて見えながらいま  
だみじかし野べの若草

草枕たびのやどりに著きて後うれしく  
雨はふりいでにけり

あとさきに人をともなふ旅ながらくれ  
ゆく道はさびしかりけり

うつせみの代々木の里はしづかにて都  
のほかのここちこそすれ

代々木  
舊東京府豊多  
摩郡代々幡村  
代々木  
現東京市渋谷  
區の内

横山桐郎

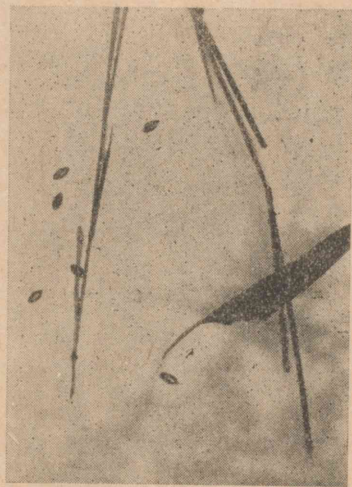
動物學者  
理學博士  
農林省蠶業試  
驗場技師  
東京市の人  
昭和七年歿  
年三十九

五 春の使者

横山桐郎

空には麗かな日光が充ち、野には枯草の間を縫つて  
流れる小川の水が温み、鳥の聲にも春の讚美が聞かれ  
る三月も終の頃になると、「待つてゐました」とばかり、流  
れの上をくるくるといとも軽やかに走り廻り始める  
六、七ミリメートルの小蟲がある。かういつてもまだ  
分からない人も、<sup>主</sup>春から秋へかけて、池や川の水の面を  
さも面白さうにくるくると廻りをしてゐる、小豆粒程な  
黒光りの小蟲、その名を「みづすまし」又は「まひまひむし」  
といふといへば、合點がゆくに違ひない。彼の名は漢

字では蚊蟲又は寫字蟲と書く。蚊蟲といふのはどういふ意味か私には分からないが、寫字蟲といふのはこの蟲の運動の仕方が、ちやうど水面に字でも書いてゐるやうに見える所から來



しますづみ

てゐるのであらう。「まひまひむし」といふ名もやはりその運動状態からとつた名に違ひない。

實際その名の示してゐるとほり、この小蟲は、蟲界稀に見る水上滑走の名手である。水上を滑つて歩く蟲には、「かはぐも」「あめんぼ」の類、「めだかはねかくし」の類、或

「はへ」の類、「みづぐも」の類など、數へ立てれば澤山ある。しかし、その技術がわが「みづすまし」の妙技に及ぶものはない。「あめんぼ」などはかなり巧みな方ではあるが、その運動はなほ直線的でこつこつしてゐる。ところが、「みづすまし」のそれになると、曲線的で頗る優雅な趣に富んでゐる。

いま、兩者の滑走をわれ／＼人間のスケーティングに譬へてみると、「あめんぼ」のは單なるスピードスケーティングに過ぎないが、「みづすまし」のそれになると、一歩進んで、フィギュアスケーティングであつて、しかもその伎倆に至つては、人間の選手を抜くこと遙かに遠

スケーティング  
水滑り  
スピードスケー  
ティング  
水滑りの一種  
競速水滑り  
フィギュアスケ  
ーティング  
水滑りの一種  
描型水滑り



く、天晴水上の名滑走者たるに恥ぢないものである。彼が滑走に使ふ道具は、六本の脚である。しかもそのうち後方の四本は短く且扁平で、水をかいて體を敏速に前進させるのがその主なる役目であるが、前方の一対は非常に發達してゐて、體の方向を轉じる舵の役目をすると同時に、又獲物を捕へるのにも便利に出來てゐる。彼が滑走に使ふ道具はこれだけであるが、又その體が非常に滑かで、水面との摩擦を防ぐのに適してゐることも、その妙技をしていやが上にも妙ならしめてゐることは見のがし難い。

「みづすまし」は、ちよつと見ると、絶えず水面を滑走し

てゐるかのやうに思はれるが、彼もまた生物である以上、時に休息もする。さういふ場合には、水面にじつと靜止してゐることもあるが、多くは水面から出て、棒杭や水草の莖にはひ上つて休んでゐる。しかし、人が近づいたりすると、忽ちまた滑走を始める。そして、その驚が激しい時には、水中に潜りこんでゆき、水底に横たはつてゐる棒切れの下とか、水草の根際とかに身を隠してしまふ。やがて危険が去つた頃、再びついと水面に浮かび出て、欣然と旋回を始める。

この水面の愛嬌者は、普通は水面に浮かんでゐるが、場合によると、前に述べたやうに水から出ることもあるが、

れば、又水中へ潜入することもある。又時には水から飛び出して空中を飛翔することさへある。彼は實に水・陸・空の三界を自由に翔け廻ることの出来る果報者である。彼は腹部の背面に呼吸器を持つてゐて、これを覆うてゐる羽の下に空氣を貯へておき、それから酸素をとることによつて、水中でも呼吸を續けることが出来る。しかし、その場合、酸素の量には限があるから、いつまでも水中に居ることは出来ない。數分の後は、水面に出て來て空氣を新にする必要がある。

空中を飛翔するのは主に夜間で、晝間太陽が輝いてゐる時には飛ばない。前の日の夕方までは全く死の

水たまりであつたのに、翌朝見ると、かはいらしい「みづすまし」がさも愉快さうに踊つてゐるのを見ることがあるが、さうした現象は、彼の飛翔を物語るものである。しかし、かうした性質は、たゞに「みづすまし」に限らず、水に棲む蟲類の大部分を通じて持つてゐるもので、神社の天水桶の中に「げんごらう」が泳いでゐたり、雨上りの水たまりに「あめんぼ」が遊んでゐたりするのは、彼等に水・陸・空の三界に生活し得る機能が與へられてゐるからに外ならぬ。總じて水棲昆蟲といふものは、もと陸棲を原則としてゐたものが、漸次に水棲に移つて行つたものであるから、全然水棲になり切らないで、往時

の陸棲時代の習性がいまだに残つてゐるものと見なされてゐる。それ故、彼等水棲昆蟲類は全然水中ばかりに、若しくは全然陸上或は空中ばかりに生活するとはむづかしいので、中には、幼蟲時代を水中で送り、親になると陸上若しくは空中で生活するやうになるものもある。「とんぼ」や「かげろふ」はその例である。

ところで、「みづすまし」は、親になると水陸兩棲生活をする事が出来るが、その幼蟲は全くの水棲蟲で、一歩も陸上へ上ることは出来ない。そして體の兩側にあつた鰓で呼吸をしてゐることは魚同様である。

この蟲は親子共に水棲の小動物を食物として生活

してゐる。そして、面白いことには、親蟲の眼は上下に分かれてゐて、上側の眼は上を、下側の眼は水中を見る役をなすものと解釋されてゐる。

秋十月十一月頃になると、彼等は皆水底の泥の中に潜りこんで、冬越しの準備に入る。そして一冬を全く眠つて送るが、再び春が訪れ、春光が野にあまねくゆきわたる頃になると、いち早く隠れ家を出て、ひよつこり水面に現れ、銀の小粒のやうな體を惜し氣もなく回轉させて、春の來たことを告げ知らせる。私は春早くこの蟲の姿を見る度に、お、春の使者よ、もうお前は來たのかと呟く。

(優曇華)

夏目漱石  
名は金之助  
英文學者  
小説家  
東京市の人  
大正五年歿  
年五十

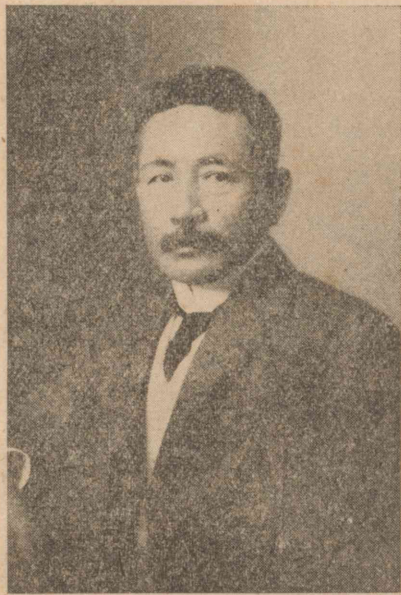
### 六 峠の茶屋

夏目漱石

「おい」と聲を掛けたが、返事がない。  
軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。  
向う側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇か  
らつるされて、屈託氣にふらりと揺れる。下に駄  
菓子の箱が三つばかり竝んで、そばに五厘錢と文久錢  
が散らばつてゐる。

「おい」と又聲をかける。土間の隅に片寄せてある白  
の上にふくれてゐた雞が驚いて眼を覺す。くゝ、く  
くゝと騒ぎ出す。敷居の外に、土竈どくわが今しがたの雨に

濡れて半分程色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜がかけ  
てあるが、土の茶釜か銀の茶釜か分からない。幸ひ下



夏目漱石

は焚きつけてある。  
返事がないから、  
無斷でずつと這入  
つて、牀几の上に腰  
を下した。雞は羽  
搏きをして白から

飛び下りる。今度は疊の上へあがつた。障子がしめ  
てなければ、奥まで馳けぬける氣かも知れない。雄が  
太い聲でこけつこつこといふと、雌が細い聲でけゝつ

こつこといふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐ

るらしい。牀几の上には一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つてゐる。雨は次第にをさまる。しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出た。

どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。竈に火は



(筆穂百福平) 屋茶の峠

燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつてゐる。線香は暢氣に燻つてゐる。どうせ出るにはきまつてゐる。しかし、自分の店をあけはなしても苦にならないとみえる所が、都とは少し違つてゐる。返事がないのに、牀几に腰をかけて、いつまでも待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。その上、出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

二三年前寶生の舞臺で高砂を見たことがある。その時、これは美しい活人畫だと思つた。箒を擔いだ婆さんが橋懸りを五六歩來て、そろりと後向きになつて、爺さんと向かひ合ふ。その向かひ合つた姿勢が今で

寶生  
寶生流  
能樂五流の一  
高砂  
能樂の曲名

も眼につく。余の席からは婆さんの顔が殆ど眞むきに見えたから、あゝ美しいと思つた時に、その表情はびしやりと心のカメラへ焼きついてしまつた。茶店の婆さんの顔はまるでこの寫眞に血を通はしたやうだ。

「お婆さん、此處をちよつと借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、さぞおこまりでござんしよ。お、お、大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましょ。」

「そこをもう少し燃しつけてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあお茶を一つ。」と立上りながら、しつゝと二聲で雞を追ひ下げる。こゝゝと馳け出した二羽は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛び出す。

「まあ一つ」と、婆さんはいつの間にか刳拔盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼きつけてある。

「お菓子をと、今度は雞の踏みつけた胡麻ねちと微塵棒を持つてくる。」

婆さんは袖無の上から襷をかけて、竈の前へうづく

まる。余は懷から寫生帖を取り出して、婆さんの横顔を寫しながら、話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「えゝ、毎日のやうに鳴きます。この邊は夏も鳴きま  
す。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「生憎今日は——先刻の雨で何處ぞへ逃げました。」

折柄竈のうちがぱち〜と鳴つて、赤い火がさつと  
風を起して一尺あまり吹き出す。

「さあおあたり。さぞ御寒かろ。」

といふ。軒端を見ると、青い烟が突當つて崩れながら  
に、微かな痕をまだ板庇にからんでゐる。

「あゝ、好い心持だ。御蔭で生き返つた。」

「いゝ、工合に雨も霽れました。そら、天狗巖が見え出  
しました。」

逡巡として曇がちなる春の空をもどかしとばかり  
に吹き拂ふ山嵐の、思ひ切りよく通り抜けた前山の一  
角は、未練もなく晴れ盡くして、老嫗の指さす方に巘岨  
と、荒削りの柱の如く聳えるのが天狗巖ださうだ。

(漱石全集)

千家元麿  
詩人  
東京市の人  
明治二十年生

七 詩二篇

千家元麿

生長

木が若葉をつけ、  
静かに、氣長に、  
しかし見る見るうちに  
育つてゆくのをみると、  
自分がかうしてはゐられない、  
無駄な時間を費すのがたまらない。  
およそ自然は時間を浪費しない。

〔出所〕  
詩集「虹」

海

海が見える、  
充溢した歡喜で  
張りつめたやうな  
海面の美しさ。  
何といふ静かな力のこもつた海、  
永遠の緑を深く湛へて  
盛り上つてゐる海。  
日に輝いて、純白な帆が  
花のやうに流れてゐる。

〔出所〕  
詩集「炎天」



若山牧水  
名は繁  
歌人  
宮崎縣の人  
昭和三年歿  
年四十五

### 八山寺

若山牧水

目が覺めて見ると、雨戸の隙間が明るくなつてゐる。もう爺さんも起きた頃だと勝手元の方に耳を澄ましたが、何の物音もせぬ。そのうちに、遠く近く鳴く朗かな鳥の聲が耳に入つて來た。何とその種類の多いことだらう。あれかこれかと心あたりの鳥の名を思ひ出してみても、とても數へきれぬほどさまざまの音色が枕の上に落ちて來る。私はこらへきれなくなつて飛び起きた。そして雨戸を引きあげた。照るともなく、曇るともなく、燻り渡つた一面の光で

ある。見上げる杉の木立は、次から次とたゞ靜かに押竝んで、見渡す限り風のけはひもない。それからそれと眼を移してゐた私は、杉の木立と木立との間に、遙かに



比叡の木立

に光るものを見出した。麓の琵琶湖である。どこからどこまでとその周囲はわからないが、とにかく朧々とその水面の一部が輝いてゐる。

餘りに靜かな眺なので、我を忘れてぼんやりとそこらを見廻してゐたが、また一つのもを見出した。ち

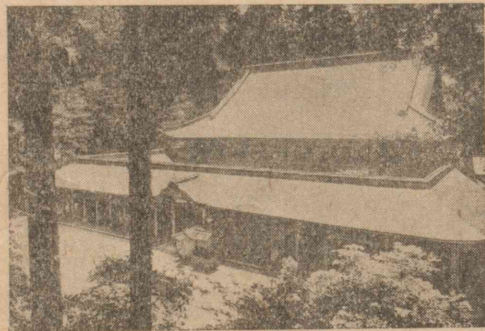
やうど溪間の様に、眼前から直ぐ落ちこんで行つてゐる窪地一帯は、僅かの間杉木立がとだえて細長い雑木林になつてゐるが、その藪の中をのそりくと半身を屈めながら何か探してゐる人があるのである。頭を圓々と剃つた大男の、紛ふ方なき寺男の髯爺さんである。それを見ると、妙に私は嬉しくなつて大聲に呼びかけたが、無論彼は振向かうともしなかつた。

後に庭に降りて、笥の前で顔を洗つてゐると、爺さんは青々とした野生のうどを提げて歸つて來た。「こんなものも出てゐた」と言ひながら、二三本の筍をも取り出して見せた。

比叡山  
京都府と滋賀縣との界に在る  
天台宗の總本山  
延曆寺の寺界

根本中堂  
比叡山草創最初  
の建立  
延曆寺一山の  
本堂  
淨土院  
傳教大師の廟  
所  
釋迦堂  
西塔の本堂  
四明が嶽  
比叡山の一峯  
元黒石  
釋迦堂の北に  
當る

この寺は、比叡の山中に残つてゐる十六七の古寺のうち最も奥にあつて、また最も廢れた寺であつた。住持もあるにはあるが、麓の寺とかけ持で、何か事のある時のほか、めつたに登つて來ず、年中殆どこの寺男の爺さんが、一人で留守居をしてゐるのである。四方たゞ杉の林だけで、しかも溪間の行きどまりになつた所にあるために、根本中堂だの、淨土院だの、釋迦堂だの、または四明が嶽元黒谷などへ往來する參詣人たちも殆ど立寄ることな



比叡山根本中堂

く、まる一週間滞在してゐる間、私はこの金聲の爺さんのほか、人間の顔といふものを見ることなくして過してしまつた。

多いのはたゞ鳥の聲である。この大正十年が開山傳教大師の一千一百年忌に當るといふ舊い山であるが、五里四方に亙ると稱へられる廣い森林の到る處が、殆ど鳥の聲で満たされてゐる。

朝、最も早く鳴くのが郭公である。「くわつこう、くわつこう」と鳴く。鋭くして澄み、しかも何とも言ひがたい寂びをもつたこの聲が、山から溪へ、冷たく、肌を刺すやうに響き渡るのは、大抵午前の四時前後である。こ

傳教大師  
最澄  
日本天台宗の  
開祖  
弘仁十三年  
(一四八二)歿  
年五十六

の鳥の鳴く時、山はまつたく鳴りを静めてゐる。「くわつ」と鋭く高く、さうして直ちに「こう」と引くその聲が、二つか三つ或場所で續けさまに起つたかと思ふともうその次は別の頂上か、溪の深みに移つてゐる。暫くも同じ所に留つてゐない。そして殆どその姿を人に見せたことがない。

杜鵑も朝が多い。これは必ずその邊で最も高い梢で鳴く。この鳥も二聲か三聲しか聲を續けぬが、どうかすると、取亂して鳴きたてることがある。その時は、例の「本尊かけたか」の律も破れて、まつたく急迫した亂調となつてくる。日のよく照つてゐる朝などは、聴い

てみて息苦しくなるのを感じる。この鳥は、聲よりも、  
峯から峯、梢から梢へ飛び渡る時の鋭い姿が好い。

それから、高調子の聲に混つて、何といふ鳥だか、大き  
さは燕ほどで、その尾が一尺位なのが細々と、實に細々  
と息を切らずに鳴く。これは下枝から下枝を渡つて  
歩いて、時には四五羽、その長い愛らしい尾を連ねてゐ  
るのを見る。

日が闌けて、木深い溪が日の光に煙つたやうに見える  
時、どこから起つて来るのか、大きな筒から限りもな  
く抜け出して来るやうな聲で鳴きたてる鳥がある。  
始もなく終もない、聽いてゐれば次第に魂を吸ひ取ら

れて行くやうな、寄邊ない聲の鳥である。或時はきは  
めて間遠に、或時は釣瓶打ちに烈しく鳴く。この鳥も  
容易に姿を見せぬ。聲に引かれて、どうかして一目見  
たいと、幾度も私は木の雫に濡れながら林深く分け入  
つたが、遂にその姿を見ることが出来なかつた。筒鳥  
といふのがこれである。

筒鳥の聲は、きはめて圖抜けた、間の抜けたものであ  
るが、それをやゝ小さく、且人間くさくしたものに呼子  
鳥といふのがある。はじめ筒鳥の子鳥が鳴いてゐる  
のかと思つたが、よく聽けばまったく違つてゐる。山  
鳩にも似、また梟にも近いが、そのいづれとも違つた、や

はり呼子鳥としての、言ひがたい寂びを帯びた聲である。

數へれば際限がない。晴れた朝など、これ等の鳥が殆ど一齊に、其處此處の溪から峯にかけて鳴きたてる。茫然と佇んで耳を澄ます私は、身體全體の痛み出すやうな感覺に襲はれることが再々あつた。  
(牧水全集)

おほらかに何の鳥かも谷あひの大き杉のあひをまひうつりたる

―若山牧水―

長與善郎  
劇作家 小説家

東京市の人  
明治二十一年生

關ヶ原

關ヶ原驛

東海道線の一驛

岐阜縣不破郡

關ヶ原町に在る

米原

米原驛

東海道本線との

北陸本線との

分岐點

滋賀縣坂田郡

米原町に在る

九松

長與善郎

松。

松は植物の中の王だ。

僕がはじめて自分の眼で親しく松の美におどろいたのは、いつだつたかもう随分前の事だが、――京都の方へ旅した時、たしか關ヶ原と米原の間で、汽車の窓から何氣なく、すく〜と立つてゐる松の獨得な雄姿を見た時だつた。なるほど、松にはこんな美しさがあるのだなと驚歎した。

松は、よく大人物がさうであるやうに、大器晩成の方

だ。たしかに早熟の質ではない。小松には小松の趣があり、又それは、やがてその晩成の大きさを想はせはするが、芽生から十五六年、まあ二三十年といふ處までは、どうも僕は松にまださう大した讚辭を呈する氣にはなれない。この鎌倉附近では、荒い潮風に對抗し得る樹木といつては松位のもので、一つは風よけに、一つは隣の眼かくしに、大抵の庭には松を行列させるより外に藝がないやうであるが、どうもしよつ中庭先に眺めるのにはちと素樸すぎて、やゝ殺風景の感がある。尤も、そんな事をいへば、梅にしる、櫻にしる、柿にしる、杉にしる、その他凡て喬木といはれるもので、若いの

鎌倉  
市  
神奈川縣鎌倉

がよいといふものはまづないであらう。老熟して完成の域に達した境がすばらしいものであればあるほど、その未熟時代は、どことなく間の抜けた、充實しきらぬ處があつて、その鷹揚な、のび／＼した處を賞するにしても、何分豊かな天性と持味とがまだ十分出きつてゐないために、どうしても單純で物足らぬのが自然であらう。しかるに、それが圓熟完成するために、自然がしつらへてゐるあらゆる體驗を嘗めつくし、必要な修行を積んで、今迄生長にのみ費されてゐた力が漸く中實の圓熟に向けられてくると、松の姿はだん／＼さびがつき、靈的な光を帯びてくる。かくして松が悠々老境

に入つてくる時、僕は松を仰がずにゐられなくなる。そしてあらゆる植物が、松の位の前には長上への禮を拂ひさうに見えて来る。

山の峯に突出た老松の上に、王冠の如く月がさしかかるその風光。颯々といふ嵐が松の枝をふるはすあの音の深さ。およそあらゆる音響の中で、遠い濤の音とこの松風の聲にまさるものが他にあるであらうか。

(一人旅する者)

藤原咲平

氣象學者  
理學博士

中央氣象臺長  
東京帝國大學  
教授

帝國學士院會  
員

長野縣の人  
明治十七年生

八丈島

伊豆七島(東  
京府所屬)中  
最大の火山島

八丈島測候所

中央氣象臺附  
屬八丈島測候  
所

八丈島大賀郷  
村に在る

海洋氣象臺

神戸市神戸區  
に在る

二十八日

昭和四年五月  
二十八日

### 一〇 八丈島行幸

藤原 咲平

今度の行幸には、八丈島測候所及び神戸の海洋氣象臺をみそなはせられた。これは氣象事業の光榮として我々の深く銘記し奉らなくてはならぬことであるが、このことを外にしても、數々の忘れがたい出來事を拜した。

二十八日、八丈島は夜にかけて風雨ともに強く、測候所では秒速十五メートルを測つた。海上は恐らく二十メートルを超えたことであらう。怒號する風聲は濤聲と闘ひ、御召艦から照射する探海燈は雨脚を射て

悽愴を極め、島民はひたすら大御心の安らかにましま

さんことを祈り奉つた。

不安の夜は過ぎた。しかるに

この大風雨中に御假泊あらせら

れた陛下には、明るる二十九日早

朝、御豫定どほり御上陸、御巡幸あ

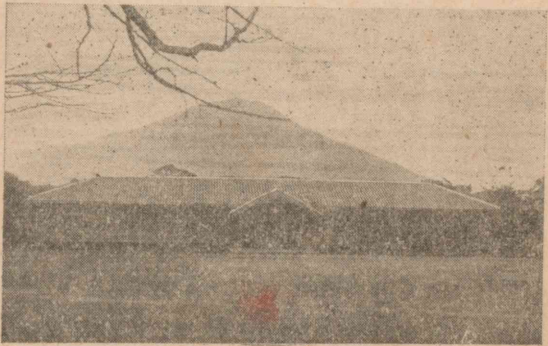
らせられる旨仰せ出された。島

民が一齊に歡呼したことは、いふ

までもない。晴れゆく霧とともに

に、島は朝日子の榮光に充ち満ちた。

御巡幸中、大賀郷小學校校庭では、全島民の優良牛、數



大賀郷國民學校

大賀郷小學校  
現大賀郷國民  
學校  
大賀郷村に在  
る

百頭を集めて天覽に供し奉つた。

一體、牛に對して美しいといふ感じを持つことは、わ

れわれ日本人には稀であらう。ところが、この日、こゝ

に集められた、飼ひたて磨きたてた牛の美しさは、全く

いひやうのないものであつた。ピロウドは美しい。

黒狐や貂の毛皮も美しい。併し、それ等は皆死んだも

の、枯れたものの美しさである。それに比べて、生き生

きした牛の光澤といふものは、實にたとへやうもなく

美しいものであつた。

陛下には、この數百の美しい牛のすべてに限りない

愛撫の御眼を注がせられ、御興深くみそなはせられた



が、やがてその中のある一頭に玉手が近づいたかと思ふと、鼻から肩の邊を二三遍撫でさせ給うたとのことである。何といふ自然な、かしまた何といふ尊いことであらう。聞くところによれば、その天恩を忝うした牛こそは、その飼主が常に全島一として誇つてゐたものであつたといふ。

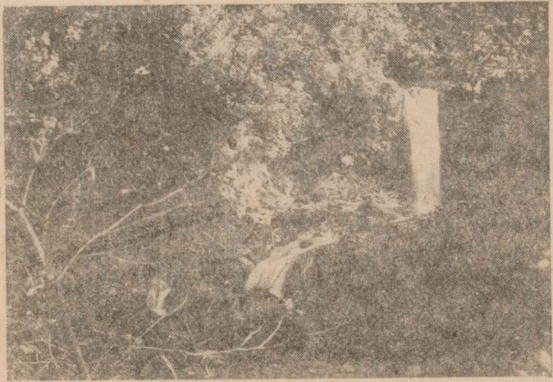
この日、御側近の方々が奉仕に努められたことも亦涙ぐましいものであつた。若い侍従の人々が、長い御行列を、後になり先になりして心を配り、指揮を取られる有様は、誠にめざましいものであつた。明るく、活潑に、又綿密に、平易に、率直に、粉飾なく、鬚などは四日も五

日も剃られない程忙しく立働いてゐられるのを見て

は、蹇々キエウ匪躬ヒコンなる一句が胸を衝いて浮かんだ。

又、鳴澤の瀧では、海拔千五百尺の高さまで、密林をくゞり、巨岩をよぢて御登攀あらせられたと承る。それが尋常の山道ではなく、梯子を用ゐなくては登れない所が二箇所もあつた

鳴 澤 の 瀧



蹇々匪躬  
王臣蹇々、匪躬  
射之故  
(易經)  
鳴澤の瀧  
不動の瀧とも  
いふ  
八丈島三根村  
に在る

侍従長  
鈴木貫太郎  
海軍大將  
男爵  
樞密顧問官  
大阪府の人  
慶應三年(二  
五二七)生

といふ。そして陛下の御趣味がこゝにあらせられ、ば、侍従長が老體を意とせず、險阻を物ともせず、終始壯

者に勝る意氣を以て御先導申しあげた至誠には、實に襟を正さしめるものがあつたといふ。

更に又、御警衛の任に當つた八丈島警察署及び警視廳から應援の警官の苦心、又島廳官吏在郷軍人青年會員等の努力も、言葉に盡くしがたい程誠意の溢れたものであつた。

私は今更のやうに、心から大御代を壽がずにはゐられなかつた。

芥川龍之介

小説家

東京市の人  
昭和二年没  
年三十六

## 二 蜘蛛の絲

芥川龍之介

或日の事でございます。お釋迦様は極樂の蓮池の縁を、一人でぶら〜お歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞白で、その眞中にある金色の蕊からは、何とも云へない好い匂が絶え間なくあたりへ溢れて居ります。極樂は今朝なのでございませう。

やがて、お釋迦様はその池の縁にお佇みになつて、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の様子を御覽になりました。この極樂の蓮池の下は、丁度地獄の

底に當つて居りますから、水晶のやうな水を透き徹して、三途の川や針の山の景色が、丁度視眼鏡を見るやうにはつきりと見えるのでございます。

すると、その地獄の底に、犍陀多といふ男が、外の罪人と一しよに蠢いてゐる姿がお眼にとまりました。この犍陀多といふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろ／＼悪事を働いた大泥坊でございますが、それでも、たつた一つ善い事をした覚えがございませう。と申しますのは、或時、この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を舉げて踏み殺さうとしまし

たが、いや／＼、これも小さいながら命のあるものだ。その命を無闇にとるといふことは、いくら何でもかはいさうだとかう急に思ひ返して、とう／＼その蜘蛛を殺さずに助けてやつたからでございます。

お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひだしになりました。さうして、それだけの善い事をした報には、出来るならこの男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ、側を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の絲をかけて居ります。お釋迦様はその蜘蛛

蛛の絲をそつとお手にお取りになつて、玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まつすぐにそれをお下しなさいました。

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一しよに浮いたり沈んだりしてゐた韃陀多でございます。何しろ、どちらを見ても眞暗で、たまにその暗闇からぼんやり浮き上つてゐるものがあるかと思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといつたらございません。その上、あたりは墓の中のやうにしんと静まり返つて、たまに聞えるもの

といつては、唯罪人が吐く微かな溜息ばかりでございます。これは、こゝへ墮ちて来る程の人間は、もうさまざまな地獄の責苦ツクリに疲れはてて、泣聲を出す力さへなくなつてゐるからでございます。ですから、さすが大泥坊の韃陀多も、やはり血の池の血に咽ハセびながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、唯もがいてばかり居りました。

所が、或時の事でございます。韃陀多が何氣なく頭をあげて血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした闇の中を、遠いゝ天上から、銀色の蜘蛛の絲が、まるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一すぢ細く光りな

がら、するく〜と自分の上へ垂れて參るではございませんか。

韃陀多はこれを見ると、思はず手を拍つて喜びました。この絲に縋りついてどこまでものぼつて行けば、きつと地獄からぬけ出せるに相違ございませぬ。いや、うまく行くと極樂へはいる事さへ出來ませう。さうすれば、もう針の山へ追ひ上げられることもなく、血の池に沈められることもある筈はございませぬ。

かう思ひましたから、韃陀多は早速その蜘蛛の絲を両手でしつかりとつかんで、一生懸命に上へ〜とたぐりのぼり始めました。もとより大泥坊のことでご

ざいますから、かういふ事には昔から慣れきつてゐるのでございます。

しかし、地獄と極樂との間は、何萬里となく隔たつてゐますから、いくら焦つてみた所で、容易に上へは出られません。稍暫くのぼる中に、とう〜韃陀多もくたびれて、もう一たぐりもたぐれなくなつてしまひました。そこで仕方がございませぬから、まづ一休み休むつもりで、絲の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼつた甲斐があつて、さつきまで自分がゐた血の池は、今ではもう何時の間にか闇の

底にかくれて居ります。それから、あのぼんやり光つてゐる恐しい針の山も、足の下になつてしまひました。この分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも存外わけがないかも知れません。犍陀多は兩手を蜘蛛の絲にからみながら、こゝへ來てから何年にも出したことのない聲で、「しめた、しめた」と叫びました。

所が、ふと氣がつかますと、蜘蛛の絲の下の方には、數限りもない罪人たちが、自分ののぼつた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へくと一心によちのぼつて來るではございせんか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、暫くは唯馬鹿のやう

に大きな口を開いたまゝ、眼ばかり動かして居りました。

自分一人でさへきれさうなこの細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へることが出來ませう。もし萬一途中でできたと致しましたら、折角ここまででのぼつて來た、この肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまはなければなりません。そんな事があつたら大變でございませう。が、さういふ中にも、罪人たちは何百となく何千となく、眞暗な血の池の底からうよくくと這ひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を、一列になつてせつくと、のぼつて參ります。今

の中にどうかしなれば、絲は眞中から二つにきれて、落ちてしまふに違ひありません。

そこで韃陀多は大きな聲を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の絲は己のものだぞ。お前たちは、いつたい誰にきいてのぼつて來た。下りろ、下りろ」と喚きました。

その途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が、不意に韃陀多のぶら下つてゐる所からぶつりと音を立ててきました。ですから、韃陀多もたまりません。あつといふ間もなく、風を切つて獨樂のやうにくるく廻りながら、見るく中に闇の底へまつ

さかさまに落ちてしまひました。

後には唯極樂の蜘蛛の絲が、きらくと細く光りながら、月も星もない空の中途に短く垂れてゐるばかりでございます。

お釋迦様は極樂の蓮池の縁に立つて、この一部始終をじつと見ていらつしやいましたが、やがて韃陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顔をなさりながら、またぶらくお歩きになりはじめました。自分ばかり地獄からぬけ出さうとする韃陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當を罰を

うけて元の地獄へ落ちてしまつたのが、お釋迦様の御目から見ると、あさましく思し召されたのでございませう。

しかし、極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓著致しません。その玉のやうな白い花は、お釋迦様のみ足のまはりにゆらく、萼を動かさし、その真中にある金色の蕊からは、何ともいへない好い匂が絶え間なくあたりへ溢れて居ります。

極樂ももう午に近くなつたのでございませう。

(芥川龍之介全集)

志賀直哉

小説家

帝國藝術院員

宮城縣の人

明治十六年生

### 二二 屋根

志賀直哉

四つか五つか忘れた。が、ともかく秋の夕方の事だつた。私は人々が夕餉の支度で忙しく働いてゐる隙に、手洗場の屋根へ懸けすててあつた梯子から、誰にも氣づかれずに、一人母屋の屋根へ登つて行つたことがある。棟傳ひに鬼瓦の所まで行つて馬乗りになると、變に快活な氣分になつて、私は大きな聲で唱歌を歌つてゐた。私としては、こんな高い所へ登つたのは始めてだつた。

ふだん下からばかり見上げてゐた梯の木が、今は足



の下にある。西の空が美しく夕映えてゐる。鳥が忙しく飛んでゐる。間もなく私は、

「謙作——謙作」と下で母の呼んでゐるのに気がついた。それは氣味の悪いほど優しい調子だつた。

「あのね、其處にじつとしてゐるのよ。動くのぢやありませんよ。今山本が行きますからね。其處におとなしくしてゐるのよ。」

母の眼は少し釣り上つて見えた。ひどく優しいだけ、徒事たごでない事が知れた。私は山本の來るまでに降りてしまはうと思つた。そして馬乗りのまゝ少し後しざりをした。

「あゝつ！」母は恐怖から泣きさうな表情をした。「謙作はおとなしいこと。お母さんのいふ事をよくきくのね。」

私は、じつと眼を放さずにある、變に鋭い母の視線に縛られたやうになつて、身動きが出来なくなつた。

間もなく、書生と車夫との手で、私は用心深くおろされた。案の定、私は母から烈しく打たれた。母は興奮から泣きだした。

母に死なれてから、此の記憶は急にはつきりして來た。後年もこれを憶ふ度、いつも私は涙を誘はれた。

(暗夜行路)

飯田蛇笏  
名は武治  
俳人  
山梨縣の人  
明治十八年生

一三 水 泳

飯田蛇笏

私は水泳を好んでした。  
あまりに幽邃な谷川の邊が氣味が悪かつたので、  
つも自分より少し年上の友達を誘つてはそこへ出  
かけた。

山地の荒畠を通りぬけて、緑竹のまじつた雑木林を  
下りてゆくと、直ぐ眼の下に蒼々と湛へられた谷川の  
水が見える。それは、友達同志が幾日もかゝつて、乏し  
い谷川の水を堰き切つて拵へた、我等にとつての貴い  
水泳場である。これを拵へるには、あたりの積石を拾

ひ集めて丹念に積み上げ、石と石との隙間へは近傍の  
雑草をむしつて来て詰めたものである。石を運ぶ時、  
水の中を運ぶとたいへん軽いことがわかつて、手頃の  
石をよちくと運んで行くと、不意に水底の石車にの  
つて倒れる拍子に石を取落してしまひ、かぶりと一呑  
み水を飲んだりする。鼻腔から脳天へかけて、一種香  
しい痛さが沁み通る。そんな時は、すぐ年上の友達が  
やつて来て、苦もなくその石を拾ひ出して堰堤に積ん  
でくれる。私が雑草をひきむしつてゐる間に、彼等は  
あたりの懸崖の一端を一抱へちぎつて来て、堰堤の大  
洩れするところへたくみにあてがふ。かくてどうど

うと堰堤を越え落ちる水は、我等にこの上もなく愉快な響を與へた。

水がよく澄んだ時、そつと行つて見ると、群れをつくつた柳鮪が、靜かに泳いでゐるのが見えた。

年上の友達は、雜木林を下る時、すでに早く兵兒帶を解いてゐる。一行は岸に著くや、否や著物をかなぐり捨てて、いつせいにざんぶとばかり溜り水をめがけて飛びこむ。さうしてしきりに浴びぬいた末は、てんでに脛を桑の實色にして、顎たゝきをしながら、夏日の直射する岩の上へ這ひのぼつて、猿が餌をたべる時のやうな恰好をして日影に浴する。少し黄色みを帯びた

日光は、さながら、秋の日影を見るやうな靜寂な感じを與へる。

午天近く、私たちは雜木林をぬけて歸る。眼前に展開する荒畠のふくむ暑氣が、心地よく身邊をつゝむ。瘦桑に晝顔が絡まつて咲いてゐる。えのころ草の穂が、陽炎をあびながら、あるかなきかの熱風にかすかに揺られてゐる。私はその一穂を摘みとつて、爪をあてて二つに裂き、鼻の頭へ持つていつて、鼻を跨がせて鼻天狗の眞似を試してみた。草穂の甘つたるい妙な匂が嗅覺を掠めた。

何心なく足の先をながめた時、平生の泥足が俄に綺

麗になつてゐることに氣がついて、急に不安が襲つてきた。家庭から水泳を禁じられてゐた私は、友達と同じやうにこのまゝ歸つて行つた日には、直ぐ母に氣づかれて叱られるにきまつてゐる。しかしさういふ不安を友達に看破されるのは厭であつた。私の心は、友達のやうに快闊に自由に、自然の兒として振舞ひたい欲望に満ちて居たから。

私は家に歸つて、落著かぬ氣持で晝飯の膳に向かつた。

(磯土寂光)

正岡子規  
名は常規  
俳人 歌人

松山市の人  
明治三十五年  
致 年三十六

一四 莓と茱萸

正岡子規

明治二十六年の夏から秋へかけて奥羽行脚を試みた時、酒田から北に向かつて、海岸を一直線に八郎潟まで來た。それから引返して、秋田から横手へと志した。其の途中大曲で一泊し、六郷を通り過ぎた時に、道の左傍に、平和街道へ出る近道が出來たといふことが棒杭に書いてあつた。近道が出來たのならば、横手へ廻る必要もないから此の近道を行つて見ようと思つて、左へ這入つて行つた。所が昔からの街道でないのだから、晝飯を食ふ所も無い。やうく路傍に一軒の茶店

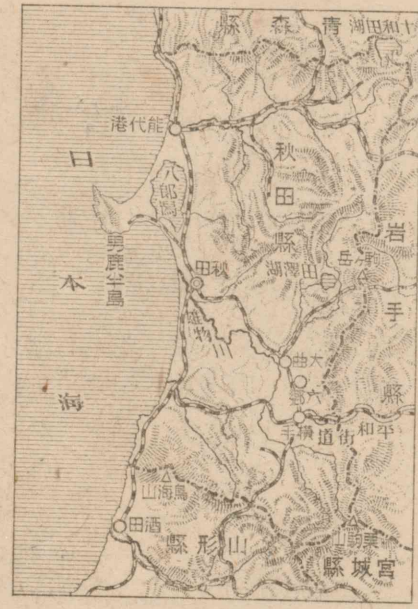
を見つけて晝飯を済まし、それから奥へ進んで行つた。所が、だん／＼山が近くなるに随つて、村も淋しくな



正岡子規

る。心細いが又なつかしい心持もする。山路にかゝつて來ると、思ひの外に路はよい。併しあまり人の通らぬ所と見えて、旅人にもあはねば木樵キコにもあはぬ。頂上近く登つたと思ふ時分に向ふを見ると、向ふには自分のある山よりも遙かに高い山がめぐつてゐる。自分

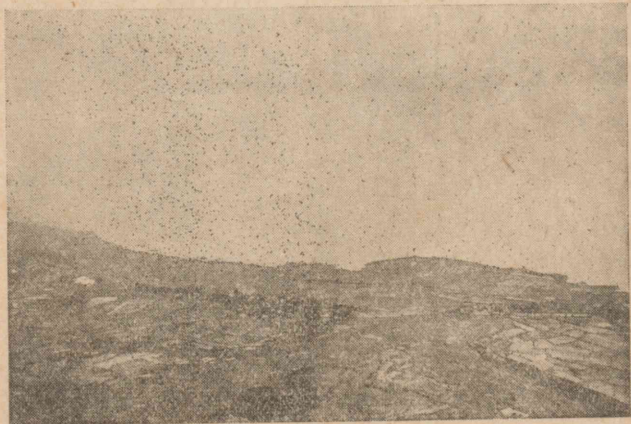
のある山と向ふの山との谷あひを見下すと、何町もあるかと思ふ程深く見える。それから山の脊に添うて



八郎海附近圖

曲りくねつた路を歩むともなく歩んで行くと、遙かひの谷底に極く平たい地面があつて、其處に澤山タクサ點を打つたやうなものが見えるが、何ともわからぬ。だん／＼歩いてゐるうちに、路が下りになつてゐたと見え、曲り角に來た時にふと見下すと、さきに點を打つたやうに見え

たのは牛であるといふ事がわかつた。牛は四五十頭もゐるであらう。併し外には人も家も見えぬ。それから又暫く歩いてみると、路傍の荆棘イバラの中でがさくといふ音がした。見るとそれは牛であつた。頭の上の方の崖ガでもがさくといふ。其處にも牛があるのである。向ふの方でも又がさくといふので、牛かと思つて見ると、今度は人であつた。始め



八 郎 田

て牛飼のある事がわかつた。崖の下を見ると、牛の群つてゐる例の平地が、すぐ目の前に近づいてゐたのは驚いた。余の位置は非常に下つて来てゐたのである。そこらの叢クサにも路にも、幾頭ともなく牛が群れてゐる。幸に牛の方で逃げてくれるので、通行には邪魔にならぬ。

それから同じ様な山路を二三町行つた頃であつたと思ふ。突然左側の崖の上に木莓の林を見つけ出した。あるもく、四五間の間は透間もない莓の茂みで、しかもいつか猿が馬場ババで見たやうな瘡莓サセイネではない。嬉しさはいふまでもない、餓鬼ガキの様にむさぼり食うた。

猿が馬場  
長野縣更級・  
東筑摩兩郡の  
界に在る西街  
道の峠

食うてもく盡きることではない。時々後の方から牛が襲うて來はしまいかと、後振向いては又一散に食ひいつた。もとより飽くことを知らぬ余ではあるけれども、日の暮れかゝつたのに驚いて、莓林を見棄てた。大急ぎに山を下りながら、遙かの木の間を見下すと、麓の村に夕日の残つてゐるのが晝の様に見える。あそこまではまだ中々遠いことであらうと思はれて心細かつた。

信州  
信濃國  
現長野縣

信州を旅行した時、路傍の家に苗代菜莢が眞赤になつてゐるのを見て、ほしくて堪らなくなつた。駄菓子

贅川  
長野縣西筑摩  
郡檜川村贅川  
鳥居峠  
同郡木祖村に  
在る



鳥居峠

屋などを覗いて見ても、菜莢を賣つてゐる所はない。木曾路へ這入つて贅川まで來た。此處は木曾第一

の難所と聞えた鳥居峠の麓で、名物蕨餅を賣つてゐる。余は、この大きな茶店に休んだ。茶店の前に馬が一匹繫いであつた。

余は主人に向かつて、鳥居峠へ上るのであるが、馬はなからうかと尋ねると、ちやうど其の店に休んでゐた馬が歸り馬であるといふことであつた。其の馬士とい

ふのはまだ十三四の子供であつたが、余はこれと談判して、鳥居峠の頂上までの駄賃を十錢ときめた。此の登路の難儀を十錢で免れたかと思ふと、余は嬉しくて堪らなかつた。併しそこらにゐた男共が其の若い馬士をからかふ所を聞くと、お前は十錢のたゞまうけをしたというて、駄賃が高過ぎるといふことを暗に諷してゐるらしかつた。

それから主人は余に向かつて、蕨餅を食ふかと尋ねるから、余は蕨餅は食はぬが、菜莢はないかと尋ねた。さうすると、其の菜莢といふのがわからぬので、主人はそこらにゐる男共に相談してみたが、誰にもわからな

い。余は再び手眞似を交せて解剖的な説明を試みた。すると、主人は突然、あゝ「さんごみ」か、それならば内の裏にもあるから行つて見ろといふ。余は臺所の様な所を通り抜けて裏まで出て見ると、一間ばかりの苗代菜莢が累々となつてゐる。これをくれるかといへば、いくらでも取れといふ。余が取りつゝある傍へ一人の男が来て取つてくれる。主人もわざ／＼出て来て何か指圖をしてゐる。ハンケチに一杯取りためたので、きりあげて店へ歸つて来た。此の代をいくらやらうかといふと、代はいらないといふ。しかたがないから、少しばかりの茶代を置いて、馬の背に跨がつた。



濃州  
美濃國  
現岐阜縣の内

馬はひよくりくと鳥居峠を上つて行く。おとなしさをなので安心はしてゐたが、時々絶壁に臨んだ所では、若しや狭い路を踏みはづしはしまいかと膽を冷さぬでもなかつた。余はハンケチの中から茱萸を出しながら、ぼつりくと食うてゐる。見下せば、千仞の絶壁、鳥の音も聞えず、足下に連なる山又山は、南濃州に向かつて走るとでもいひさうな景色の中を、馬一匹ひよくりひよくりと歩んでゐる。余は馬上に在つて口を紫にしてゐる。茱萸はとうとう盡きてしまつた。ハンケチは眞赤に染まつてゐる。もう、鳥居峠の頂上は遠くはないやうである。

(子規全集)

田部重治

英文學者

山嶽研究者

法政大學教授

富山縣の人

明治十七年生

上高地

長野縣南安曇

郡に在る梓川

上流の溪谷

飛驒

飛驒國

現岐阜縣の内

平湯温泉

岐阜縣吉城郡

上寶村に在る

乗鞍岳の西北

麓に當る

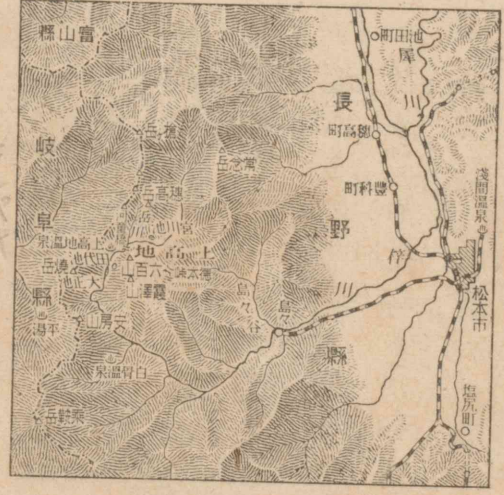
一五 上高地

田部重治

上高地溪谷は、もと松本から飛驒へ抜ける近道に當つてゐたので、當時はわづかに案内を知る旅人のみが、島々から飛驒の平湯温泉へ越すために、七千尺の天空に馬の脊のやうに連なつてゐる尾根つゞきの密林を分けて此の溪谷に下り、それから焼岳の裾を梓川に沿うてうねつて行くのであつた。

島々谷に林道が切り開かれてからの此の温泉は、徳本峠の頂上まで四里登りづめの道と、峠から梓河畔の温泉まで二里下りづめの林道と、合はせて六里の山道

を越えて達することが出来るやうになつた。



近附地高上

大木が、藍碧の流れの上に茂り合つて、幾層の闊葉は激しい水勢にふるへをのゝいてゐる。溪は益狭まり、闊

もう清流岩を噛む景色が始る。初のうちは、溪谷の両側に迫つてゐる斜面には、處々、桑畑の散在してゐるのが見られるが、追々、高い山が後からくくとおほひかゝり、椽桂山毛櫛等の

葉樹がいつしか針葉樹に變り、やがて流れの音がうしろに遠くなつた頃、振りかへつて、右手の方遠く、遙かに鬱蒼として島々の方へ長く天空を限つてゐる尾根を見、あれこそ林道のなかつた其の昔、旅人の通つた連嶺であるときけば、誰でも氣が遠くなるやうな一種の疲を感じずにはゐられないであらう。



峠 本 穂

穂高  
穂高岳  
奥穂高岳を最高峯とする山

峠の頂上に立つて見ると、白雲を頂いた穂高の秀麗な連嶺が、仰ぐやうに高く、且近く峙つてゐる。更に峠

常念山脈  
常念岳を主峯  
とする山脈

を梓川に向かつて少し下ると、右に常念山脈が物凄



梓川河童橋附近穂高連峯を望む

白くうねつてゐる。二十町ばかり下つて上高地の緩

色彩をもつて描き出されてゐる。こゝで見る穂高の姿は、たしかに今まで山といふものについて抱いてゐたすべての觀念をうち破るに足るほど氣高い。これから下りて行かうとする溪谷には、梓川の河原が數里に跨がる整然たる木立の間を分けつゝ、穂高の裾に沿うて

やかな溪谷へ下り切ると、溪聲があちらこちらに聞えて、林道は楡花柏樅落葉松梅などの林を分けて行く。

河童橋の上から見上げる穂高の氣高い姿と、岳川の溪流が梓の流れに落ちこむあたりの落葉松と白樺とのえもいはれぬ色彩と、其の間をゆつたりと流れてゐるすき透るやうな梓川の流れとは、恐らく上高地溪谷の最もすぐれた景色であらう。行手に焼岳の二すぢ三すぢの寂しい噴煙を眺めながら、樅や白樺や小梨の間に咲いてゐる楊蘭の紫紅の花を右手に見て、榛木や柳の間を分けること七八町ばかりで温泉の建物があらはれて来る。梓川の流れはこゝではひとときは緩や

かになり、牧場の様な川向うの廣場は次第に高まり、柳の茂りは白樺落葉松の木立に變り、更に梓柗の林になり、やがては秀麗な霞澤山カスミザキに高まつてゐる。

朝の上高地を味ははうとする人は、まだ此の溪谷に朝日のさゝぬ五時過頃の欄干にもたれて、梓川のほとりに眼をやるがよい。まづ眼に入るものは霞澤山カスミザキである。秀麗な其の峯頭から下つて針葉樹、それから闊葉樹へと波うつ緩やかなうねりは、梓川の對岸に左右に連なる柳と榛木と白樺と落葉松とのゆつたりした林となつて終つてゐる。此の林と川面カハとにかけて一面にかゝつてゐる薄靄は、今やかすかに揺れ動いてゐる。

此の時右の方にそびえる燒岳の一角に、何物かが作用しつゝあることが看取される。今、燒岳は河童橋に立つて見た時の山容とは全く打つて變つて、雄偉に見上げるばかりに高く見える。そして其の東の半面は薔薇色に輝き、噴煙は今しも眠からさめたかのやうに静かな曉方の天ソラに沖ウツして、梓川に向かつた斜面を蔽ふ立枯の木と熔岩の痕跡とは、益、其の雄偉さを引立ててゐる。

暫くすると、徳本峠方面から朝日が昇り、朝靄が晴れ行くにつれ、上高地一帯の溪谷には俄に銀のやうな明るい光が漂ユラひ、梓川の川面がぴかぴかと光つて来る。

しかし、河童橋から上の方、徳本峠から六百山の麓へかけての密林にとざされた約一里の間の冷たい空気はなほも温められずに残つて、氷のやうな冷たい水は其の間を山側に沿うて流れてゐる。まもなく霧は残りなく消えて、見渡すかぎり緑と萌黄モウギに蔽はれた溪谷があらはれる。

上高地の美は、殊に雨によつて發揮される。雨の上高地は今までの緑の溪谷をして俄に黄金色コウゴンに變ぜしめる。雨の日欄干にもたれて、霞澤山から梓川の兩岸の柳の林へかけて、いかに此の溪谷の物象がうつり變り行くかを眺めよ。平地よりは、一層一條々々のけぢ



梓川よりの眺望

めが明瞭な此の溪谷の雨は、まづ煙のやうな蒸氣を横になびかせる。梓川の緑の木立は、見る／＼萌黄の色を増して行く。今まで氣がつかかなかつた樹木の緑のうねりは、霧の晴れ間／＼に特に美はしく描き出される。

雨が夕暮近くなつて止む。雲が盛に動いて霞澤カスミの峯頭が時々雲間にあらはれる。しかし見渡す溪谷の下の方は、まだ一面にうすい霧にとざ

されてゐる。見る／＼溪谷がばつと明るくなる。しかしそれは霧が晴れたからではなく、夕日が靄に輝いてゐるのである。此の時、此の溪谷を充たす色彩は、平地の朝夕をのみ見てゐる人には、どうしても想像することが出来ない。溪谷全部に湧きかへる卵黄色、是が此の溪谷の此の時の靄の色を形容する總括的なしかし極めて不十分な一言葉である。

更に上高地の雷雨を経験した人は、其の光景を忘れることの出来ないものの中に數へるであらう。それは俄然として起つて来る。忽ちにして霞澤の峯頭が濛々たる雲に巻かれ、殷々たる雷が溪谷を震撼する。

向うの林から霞澤の頂上へかけて青白い火柱が立つ。無数の雨足が濛々たる雲を貫ぬき、溪聲が一齊になりどよむ。暫くすると、まづ明るさが段々増して来る。雲が切れ／＼になつて、もう日が輝いて来る。すつかり晴れあがつた後までも、二ひら三ひらの雲が、柳の林に遅れさまようて、さながら歸り路を忘れたかのやうに見える。が、それも遂には何れへか去つてしまふ。月夜の上高地、特に夕立後のそれは、最も印象深いものである。月の上る前、まづ霞澤、一帯の尾根が明るみを帯びて来る。やがて、白い太い光が、白銀の矢のやうに、斜に尾根を越えて對岸の穂高の山塊にそゝがれる。

暫くすると、月が少しく山の端にあらはれ、あれ〜と思ふうちに、全部山を離れる。そしてそれは私達が平地の八月に眺め慣れたものとは異なり、正しく十月の月である。月の姿があらはれると共に冷たい霧が川向うの林や川面に立ちこめて来る。此の時の霞澤一帯の山と、梓川のほとりの美はしさとは、如何なる言葉を以てしてもあらはすことは出来ない。

(山と溪谷)

一六 空の色

岡田武松

岡田武松  
氣象學者  
理學博士  
帝國學士院會  
員  
千葉縣の人  
明治七年生

晴れた日に空を仰ぐと、天頂の附近は一帯に碧色が鮮かであるが、地平線に近づくにつれて、その碧色が次第に薄らぐ。そして、太陽の近傍は著しく黄色を帯びてゐる。又高山の頂に立つて空を仰ぐと、蒼々として紺碧の色を呈し、如何にも鮮麗である。わが國では、春と夏には空の碧色が幾分か薄らぐが、秋と冬には紺碧になる。

空が碧色を呈するのは、勿論空氣に色があるのではない、日光の中の青色の光が、空氣の分子や空氣中に浮

游してゐる細塵に散亂せられて目に入るからである。元來、日光は所謂白色であるが、これは、赤・黄・緑、その他種々様な光、換言すれば、種々の異なつた波長を有する光が集合したもので、その光が大氣中を通つて來る際に、空氣の分子や細塵によつて散亂せられる。その散亂光は波長の短い光が最も明るく見える。元來、見える光の中では、堇色の光の波長が最も短いのであるが、散亂光の中には赤も黄もみな多少はひつて來るから、平均上は青色になる。これが空の青色に見える理由である。分光器で青空を見ると、青色と堇色とが著しく勝つてはゐるが、綠・黄・赤などの色も多少は含まれて

ゐる。

粒の大きな細塵が空氣中に多く存在すると、波長の大きな光、例へば黄色の光などまでが、それに散亂されて混じて來るから、空の色は白つぽくなる。地平線附近の空、殊に都市の低空が、碧色が薄らいで、幾分か白く見えるのはこの爲である。又細塵の粒が極く小さく、且その數が多いと、空は紺碧に見える。高山の頂で仰ぐ空が深い蒼色を呈するのは、この原因に基づくのである。雨後の空が紺碧に近いのも、雨の爲に粗大な細塵が洗ひ去られて、多くは微細なものになるのが、一つの原因である。



日没の際に、西空の地平線に近い部分が紅黄色に染まり、日によつては、燃え出るやうな眞紅の色をあらはすことがある。これは夕焼の現象である。日出の際にも、東天が紅を潮して薄紅くなり、時としては、やはり燃え出るやうな色になることがある。これは朝焼の現象である。

元來、朝焼と夕焼の色彩は決して單純のものではなく、その日の空氣の状態によつて著しい差異がある。例へば、好晴で天空に雲のない時は、夕焼は紅色に黄色を帯びるが、天空に雲翳の多い時は、紅色に幾分黒味を

帯びて、血色に近い色合を呈する。西空に積雲などのまばらに浮かんでゐる時には、夕焼は金紅色を呈し、これに幾分紫彩を混じて、その美しさは到底筆紙に盡くし難い。

朝焼の色は夕焼とは幾分異なつた點がある。朝焼の色は、多くは洋紅の紅色で、紅インキを薄くして塗つたやうである。颱風の前日などには、それが幾分か黒味を加へて、甚だ物凄い。元來、朝焼と夕焼の色彩は天候と密接の關係があり、その色彩によつて翌日の天候を卜することが出来る。例へば夕焼が紅色で稍黄色味を帯びてゐると、翌日は好晴のことが多いが、黒味を

帯びてみると、大抵は雨になる。又、朝焼が著しく美麗な紅色を呈する時はやはり雨になるが、色彩が鮮明でなければ寧ろ好晴である。この點では、朝焼と夕焼とは正に反對になつてゐる。支那では、昔は朝焼を朝霞といひ、夕焼を暮霞といつた。五雜組に「朝霞市を出でず、暮霞千里を走る」とあるのは、恐らくこの間の關係をいつたものであらう。

(氣象學)

五雜組  
十六卷  
見聞雜錄  
明の謝肇淛撰

杉村楚人冠

名は廣太郎

著述家

朝日新聞社顧問

和歌山市の人

明治五年生

湖

手賀沼

千葉縣東葛飾郡に在る

### 一七 湖畔

杉村楚人冠

#### 霧

湖畔の秋がやう／＼半ばにならんとする頃、よく夕方から朝にかけて霧が一面に立ちこめる。

昨夜も日の暮から霧が次第に深くなつて、折からの月の光も雲を隔てたやうに見え、野も山もさながら白紗を引いた趣を現したが、夜のふけると共にますます深く、これが木の葉にたまり、木の枝を傳つて、末つひに銅板ぶきの山莊の屋根にぼた／＼と落ちる音は、目の覺める毎に雨かと疑はれた。

夜が明けはなれて後も、霧は晴れない。空を見上げると、細かいく〜絲のやうなのが、落ちつく力もなく、右往左往に亂れ散つてゐるのが見える。霧は雨のやうに「降る」でなし、露のやうに「下りる」でもなし、なるほど昔からいひ習はしたやうに「立つ」のだなといふことが思ひ當る。この立つ霧が、餘所ではたまつて流れて落ちるが、蜘蛛の巢の上ばかりには、その一すぢ〜にかそけき玉をつらねて、樹枝や軒端に何かの細工を施したやうに残つてゐる。いつもこんなところに、こんなに蜘蛛の巢があつたらうかと驚かされる。

湖面を見渡せば、山も水もひたすらに白くぼけて、こ

宅 東葛飾郡我孫子町に在る  
 藤ヶ谷 同郡風早村藤ヶ谷  
 總武鐵道 大宮・柏兩驛間及び柏・船橋兩驛間の私設鐵道  
 六實驛 柏・船橋間の柏驛から三番目の驛  
 東葛飾郡高木村に在る  
 高柳驛 同郡風早村に在る

の年ごろ見なれたうつし世の姿とも覺えない。やがて日が上り、霧の晴れるに連れて、次第々々に遠近濃淡のけぢめがついて、明け行く空のやうに明けて行く。現實のこのありふれた世界を、暫くの間にもせよ、神祕化してくれる霧がうれしい。

朝霧のひどい日は、かならず後にからりと晴れるのもうれしい。

道

宅から藤ヶ谷のゴルフへ出かけるには、總武鐵道の六實驛で下りて、こゝから自動車を飛ばすか、又は六實の二つ手前の高柳驛から村道をてく〜歩くかの、二

つに一つであるが、自分はいつも高柳から歩くことにきめてゐる。

六實からの道は、近頃ゴルフ場の爲に開いた坦々たる新道路であるが、高柳からでは、何十年來手入一つしたこともないやうな悪道である。でこぼこといふやうな生やさしい凹凸ではない。がつくりと落ちこんだ轍の跡などは、深さ二尺に近い大穴をあけて、その中に水が美しく澄んでゐるばかりか、冬を知らぬ黒い小さな蟲がその中に浮かんでゐる。その穴の兩側に盛り上つた土は、けふこの頃の霜でぐちゃぐちゃになつて、一たび踏みこんだら、足がずぶぐちゃとはひつてしまふ。

幅こそ二間以上あれ、とても人間の通れる道にはなつてゐない。

公道が人間の通れる道になつてゐないとなると、どこかに人間の通れるやうな道を開かうとするのが人間の常識であつて、この邊の村人はいつの間にもやら、道路の兩側にある畠を踏みじり、森の下草を横ぎり、勝手次第に勝手なところへ道ならぬ道を開いてゐる。

この自然に開けた道が、高柳の停車場を出ると直ぐ左手の栗林の中に通じ、それから少し行くと、大きな松林の中をつきぬけてゐる。この松林がやゝ暫くつゞいた後、澤に下りる。こゝに水田が開けて、中に野川の

清流が流れてゐる。

かういふ野道を歩くのは、人通りの多い街道などで前後左右に氣を配りながら歩いて行くのと違つて、まことに心がのびくとする。こゝにはすれちがふ自轉車もなく、かけ抜けて通るトラックもない。それにこの松林の中といふものが、しんとして、靜かで、清らで、一時ではあるが、さながら深山幽谷を行く趣がある。砂利を入れ、割栗石をたゞきこんだ街道よりも、人間が足の向くに任かせて自然に開いた道はたふとい。私はこゝを通ることを、ゴルフに行く楽しみの一つに數へてゐる。

(續湖畔吟)

長谷川二葉亭  
名は辰之助

小説家  
東京市の人  
明治四十二年  
歿年四十六

一八 ポ、チ

長谷川二葉亭

春雨のしとくと降る、薄ら寒い或夜の事であつた。私は例の通り宵の口から寐てしまつたが、ふと目を覺すと、有明が枕元をぼんやりと照らして、四邊は仄暗くしんとしてゐる中に、幽かにきやんくといふやうな音が聞える。不思議に思つて耳を澄ましてゐると、その音は次第に大きく高くなつて終には門前に聞える。かうなつてみると、疑ひもなく、小狗の鳴き聲だ。時々咽喉でも締められるやうに、けたましくきやんくと鳴きたてる、其の聲尻が、やがてかほそく悲しげにな

つて、めいるやうに遠い〜所へ消えて行く——かとすれば、忽ちまた近くで堪へ切れぬやうに鳴き出して、くん〜と鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時もある。

私は元來動物好きで、わけても犬は大好きだから、近所の犬は大抵なじみだ。けれども、こんなかほそい、いたいけな聲で鳴くのは一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜著の中から首を出すと、どうしたの、寐られないのかえ」と、母が此方を向いた。私は此の返答は差措いて、

「あれは白ぢやないねえ。もつと小さい狗の聲だね

え。どうしたんだらう。」

ときくと、母は「大方何處かの人が棄てたのだらう」といふ。そして「もう晩いから黙つてお寐とやさしくいつて、あちらを向いてしまつた。」

私も亦夜著を被つた。狗は門前を去つたのか、鳴き聲が稍遠くなる。寐られぬまゝに、私は夜著の中で棄狗のことを繰返し〜考へてみた。——まづ何處かの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。ちつぽけな、むくむくしたのが重なり合つて、首を擡げて、みい〜と乳房を探してゐる所へ、親犬が餘所から歸つて來て、其の側へどさりと横になり、片端から抱へこんで舐めて

やると、小さいから舌の先でたわいもなくころ／＼と  
轉がされる。轉がされては大騒ぎして起き返り、又よ  
ちよちと這ひ寄つて、ぼつちりと黒い鼻面でお腹なかを探  
り廻り、漸く柔らかな乳首を探り當て、あわてて吸ひつ  
いて、小さな兩手で揉み立て／＼吸ひ出すと、甘い温か  
な乳がどく／＼と出て來て、咽喉へ流れこみ、胸を下つ  
て、何ともいへずおいしい。と、腋の下から、まだ乳首に  
ありつかぬ兄弟が鼻面で割りこんで來る。取られま  
いとして、産毛の生えた腕を突張り、大騒ぎをやつてみ  
るが、到頭取られてしまひ、又其處らを探ねてほかの乳  
首に吸ひつく。其のうちにお腹もくちくなり、親の肌

で身體も温まつて、とろけさうな好い心持になり、つい  
うと／＼となると、含んだ乳首がぬけさうになる。夢  
心地にもあわてて又吸ひついて、一しきり吸ひたてる  
が、ちきに又たわいなくうと／＼となつて、乳首が遂に  
口をぬける。ぬけても知らずに口をあいて、小さな舌  
を出したなりで、一向正體がない。其の時忽ち暗闇か  
ら大きな腕がぬつと出て、正體なく寐入つてゐる所を  
むずと引摺み、宙に吊す。驚いて目をぼつちり明き、い  
たいけな聲で悲鳴をあげながら、四つ足を張つてもが  
く中に、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮  
屈で息がつまりさうだから、出ようとするが出られな

い。暫くもがいてゐる中に、ふと足搔が自由になる。と襟元を撮まれて高いく所からどさりと落された。うろくとして其處らを視廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な所で、誰もゐない。茫然としてゐると、雨に打たれて見る間に濡れしよぼたれ、怖しく寒くなる。身振るひ一つして、くんと親を呼んでみるが何處から出て來ない。途方に暮れて、よちくと這ひ出し雨の夜中を唯ひとり、温かな乳房を慕つて悲しげに鳴き廻る。——それが、さつき一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、何時か又戻つて來て、何處をどう潜りこんだのか、今は鳴き聲が正しく

玄關先に聞える。

私はゐたゝまらないやうな氣になつて、無理やりに母にせがんで玄關へ出た。母が沓脱へ降りて格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰ると、さつと夜風が吹きこんで、雪洞の火がちらちらと靡く。其の時、小さな鞠のやうな物がつと軒下を飛び退いたやうだつたが、やがて雪洞の火先が立ち直つて、一道の光がさつと戸外の闇を破り、雨水の所々に溜つた地面を一筋細長く照らし出した所を見ると、つい其處に、生後まだ一箇月も経たぬ、むくくと肥つた赤ちやけた狗兒いぬごらが、小指程の尻尾を千切れさうに掉りたてて此方を見上げてゐ



る。形體は私が寝てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて泥だらけになり、だらりと垂れた、割合に大きい耳から雫を滴らし、ぼつちりと二つの眼を青貝のやうに列べて光らせてゐる。「おやく、まあ可愛らしい！」

と、母もつい言つてしまつた。況や私は犬好きだ。じつとして見てはゐられない。母の袖の下から首を出して、ちよつくと呼んで見た。

と、さほど畏れた様子もなく、ちよこくと側へ來て、流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からぐいぐい押し上げるやうにして舐め廻

し、手をくれるつもりなのか、頻りに圓い前足を舉げてばた／＼やつてゐたが、果はやはりと痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くて堪らない。母の顔を見上げながら、

「お母さん、何かやつて。」

「やるのも好いけど、ゐついてしまふと仕方がないねえ。」

と、口では拒むやうな事をいひながら、それでも臺所へ行つて、缺茶椀に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて來てくれた。

早速履脱へ引入れてこれをあてがふと、小狗は一寸

香を嗅いで、直ぐ甘さうにびちや〜と舐め出したが、汁が鼻孔へ入ると見えて、時々くしん〜と小さな嘔をする。忽ち汁を舐め盡くして、今度は飯に掛つた。ほかに争ふ兄弟も無いのに、頻りに小言をいひながらがつ〜と食べ出したが、飯はまだ食ひ慣れぬかして、とかく上顎に引附く。首を掉つて見るが、そんな事では中々取れない。果は前足で口の端を引搔くやうな眞似をして、大もがきにもがく。

此の隙に私は母と談判を始めて、今晚一晚泊めてやつてと、雪洞を持つた手にぶら下る。母は一寸澁つたが、もうかうなつては仕方がない。お父さんに叱られ

るけれど、といひながら、棧俵法師を捜して来て、履脱の隅に敷いてやつたが、其の晩一晚鳴き通されて、お蔭で母は父に小言をいはれたさうだ。

犬嫌ひの父は、泊めた其の夜を鳴き明かされると、うんざりしてしまつて、あくる日は是非逐ひ出すといひ出したから、私は小狗を抱いて逃げ廻つて、どうしても離さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、しかしそれも一時の事で、其の中に小狗も獨り寝に慣れて、夜も鳴かなくなる。と、逐ひ出す筈のものに、何時しかポチといふ名までついて、姿が見えぬと、父までが一緒に捜すやうになつてしまつた。

北原白秋  
 名は隆吉  
 詩人 歌人  
 帝國藝術院會  
 員  
 福岡縣の人  
 明治十八年生  
 良寛  
 俗名山本文孝  
 禪僧  
 歌人  
 越後國(新潟  
 縣)の人  
 天保二年(二  
 四九一)歿  
 年七十四

一九 良寛さま

北原白秋

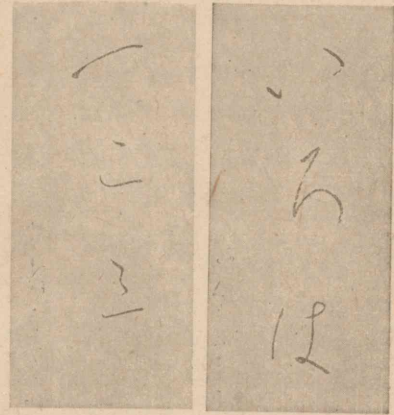
越後の良寛禪師は童心の持主であつた。かういふ  
 お話がある。

ある時、良寛さまはいつもの通り、子供たちとかくれ  
 んぼをしてをられた。鬼になつた良寛さまが目を瞑  
 つて、「もういいよ」といふかはいい聲を一心に待ち受け  
 てをられる。とちやうど日のくれ時で、子供心の何が  
 な欲しくなる時である。家々の燈がちらく、點き出  
 すと、子供たちは急に遊をやめて、一人のこらずこそこ

そと歸つてしまつた。そこは子供だから、良寛さまも  
 何もうつちやらかしである。むろん、いくら待つても  
 「もういいよ」といふものはない。そのうちに日が暮れ、  
 長い夜が來た。さうして、たうとう夜が明けてしまつ  
 た。良寛さまはそれでも一所懸命だ。心から目を瞑  
 つて、やはり同じ處に同じ姿をしたまゝ、「もういいよ」と  
 子供が呼ぶのを待つてをられた。

それから、またある時のことである。良寛さまが今  
 度はかくれることになつた。そこで見つけられては  
 大變だといふので、さつそく田圃の稻叢の中にもぐり

込んで、それはくく小さくなつて、まるで二十日鼠のやうに頭からすつぽりと稲藁をかぶつて、おどくくしてをられた。すると子供たちは、またいつもの通り、一人のこらずこそくくと歸つてしまつたのである。それを良寛さまは少しも御存じない。また日が暮れて夜が来て、また夜が明けた。稲叢には霜がまつしろに置き、朝の日のぼり始めると、百姓がやつて来て、何の氣もなく稲束をやにはにはづすと、おやつと驚いた。良寛さまが



良寛 筆蹟

小さくなつてもぐつてをられる。「おや、良寛さまがといふと、慌てて、そつとしろ、そつとしろ、子供が見つける。」

ある時、赤々と實が熟れて、鈴なりになつた柿の木の下で、小さな子供がひとり泣いてゐた。良寛さまが通りかゝつて、「どうしたんだ」と圓い頭をさすつてやると、「あの柿が食べたい」といふ。「よし、それではわしが取つてあげる。泣くのではないぞ」といひながら、やつとこさと木の上にはひあがつた。枝につかまつて、あれかこれかと探してゐるうちに、それは全くうまさうな柿の實だ、一つ取つて口をつけると、それがおいしい

のなんの良寛さまは夢中になつて、齧るはく、まるで  
猿蟹合戦の赤いお猿のやうに、むしやくと食べほれ  
てゐる。下にゐる子供こそあはれである。それを見  
て火のやうに泣き叫ぶとはじめて良寛さまは氣がつ  
いた。さあ、しまつた、これは！といふので、慌てて枝を  
ゆさぶつた。

(洗心雑話)

島木赤彦  
本名久保田俊

歌人  
長野縣の人  
大正十五年歿  
年五十一

二〇 かるさんと米

島木赤彦

先年、私の歌の友人が山形縣から上京した。子ども  
の時から山形の山中に百姓生活をしてゐて、近縣へも  
おそらく出たことがないのに、急に東京へ出るといふ  
のであるから、かなり億劫な思をして、やつと決心した  
らしい。

友人はそのために縞のかるさんを新調した。耕作  
木樵用のかるさんは紺無地であるが、改つた他出用  
は縞のをはく。それも上京のためにわざと新調し  
たのであるから、友人のためには容易ならぬかるさん

奥羽線  
福島・青森兩  
驛間の鐵道  
上野驛  
東北本線の起  
點  
東京市下谷區  
に在る

私の宅  
同市麴町區六  
番町に在つた

である。友人はそのかるさんをはいて、奥羽線の一山驛から汽車に乗りこんで、翌る朝上野驛に著いた。汽車の中でもかるさん著用の客は珍しい。まして東京の停車場や市中にかるさんを見出すことはおそらく絶無であらう。随つて、友人は汽車に乗りこんで以來、衆人注視の的となつたのであらうけれども、彼はその注視を氣づくほど敏感な近代人ではなかつた。上野驛に著いて、いよく東京の土を踏んでも、相變らず山形縣山中の農人であつた。

この農人は、東京の市内電車に乗つて麴町にある私の宅まで來る順序を知らなかつた。いきなり目の前

に留つた電車に飛び乗つた。車掌が停留所ごとに町の名を呼ぶけれども、彼にはすべて縁のない名前である。そのうちに「S町」と呼ぶ車掌の聲が聞えた。彼はそれを聞くと直ぐ電車から飛び下りた。そして通行の人に、この邊にN書店といふ本屋があるかと聞いた。N書店は停留所のすぐ近くにあつた。彼は國にゐるとき、私どもと一緒に發行する歌の雑誌の奥附に、發賣所N書店と印刷されてあることを知つてゐた。そして雑誌について同書店の一方ならぬ御厄介になつてゐることを聞いてゐた。彼は車掌の呼ぶ「S町」の聲で直ぐN書店を想ひ起すとともに、日頃御厄介になつて

みる自分等の雑誌のため、感謝の意を表せずにもられなかつたのである。

かるさん姿は間もなくN書店の店頭に現れ、ついで主人の前に案内された。主人も目の前の農人姿には少からず驚異の目をみはつたらしい。何者であるかがわからなかつたのである。彼はそんなことには構はず、山形辯を以てずん／＼自分の來意を告げた。自分は山形縣山中のものであるが、自分等の雑誌について非常に厚意を蒙つてゐることを聞いて、久しく感謝の意を持つてゐたが、今度始めて上京して、たま／＼電車の中で「S町」の名を聞き、急ぎ飛び下りてお禮を述べ

に來たのだといふのである。主人は非常に喜んで、直ぐに使を以て、今山形からこれ／＼の人が訪ねて來た、是非晝餐を共にしたいと申し越されたので、私も直ぐ出かけて、同書店の二階で始めて對面した。

この友人は、それから私の宅に數日滞在した。菓子を出す、その菓子を掌の上に置いて、これは何錢ばかりの菓子かと聞く。いかにも物體ないといふ様子である。食べる時は一旦額の邊まで上げて頂いてから食べる。話をしながら時々羽織を氣にして手で撫でる。聞けば國許出立の時、父上から借りて著てきたのださうである。

歌仲間の一人である且畫伯が晚餐を共にしようとしてやつて來られた。その時畫伯が紙を展べて、その友人の肖像を畫がかうとした。友人はいかにも恥づかしさうにして坐つてゐた。畫がきをへて、それを友人に贈るといはれても、なほ恥づかしさうにしてゐる。菓子さへ頭上に頂いて食べるこの友人が、畫に對して感謝の詞を述べない。あとで、この肖像畫の非常に貴重であることを話すと大いに驚いた。そして明日お禮をいひに連れていつてくれといふのである。

この友人は私ども歌仲間にあつて優秀な作者である。その優秀な作歌は、この素樸と眞情とからいつも

生まれ出るのであらう。

今一人の友人は信濃の山中に住んで、同じく農人である。その友人の上京した時、白米一斗を土産として背負つて來た。「重かつたらう」といへば、「汽車の中は只だから、重いことはない」といふ。「電車に乗るに困つたらう」といへば、「米を背負つて乗らうとしたら、車掌が面倒いふから歩いて來た」といふ。私はそのころ雜司ヶ谷龜原に住んでゐた。飯田町停車場から私の宅までは一里ある。それを背負つて來て平氣である。「偉大な土産をくれたね」といへば、「東京は米が高いといふか

雜司ヶ谷龜原  
舊東京府北豊  
島郡高田町雜  
司ヶ谷龜原  
現東京市豊島  
區雜司ヶ谷町  
一丁目  
飯田町停車場  
舊飯田町驛  
中央線の舊起  
點で麴町區飯  
田町に在つた



ら持つて來たのだ」といふ。

この友人は、私の貧しきを憐み、はるゝ信州より來り、贈るに米一斗をもつてしたのである。誠に忝いが、この米は甚だ玄くてまづい。厚意を感謝して、他の米に少しづつ混ぜて頂くことにした。

この友人の歌も甚だ優秀である。彼の優秀な歌は、米一斗を信濃山中から東京まで背負つて來る根氣と眞情とから生まれ出るのである。

(赤彦全集)

松平伊豆守信綱

徳川家光の重臣

武藏國(埼玉縣)川越藩主

寛文二年(二

三二二)歿

年六十七

安松金右衛門

名は吉實

算術の達人

野火止

現埼玉縣北足立郡大和田町

野火止

多摩川

現山梨縣東山梨郡に發源し

て東京灣に注ぐ

新河岸

新河岸川

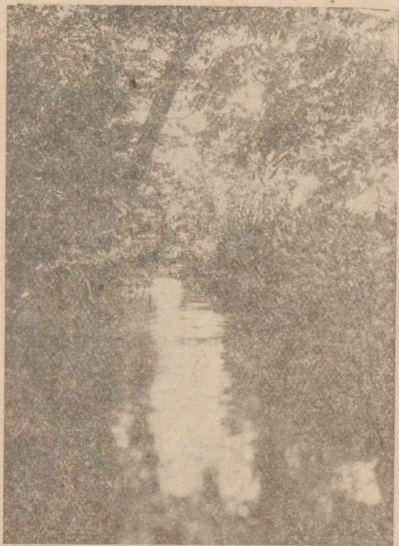
現埼玉縣川越市附近に發源し南流して荒川に入る

二 用水

松平伊豆守信綱の代官に、安松金右衛門といふあり。豆州の領分野火止といふ所に多摩川の流れを引きたらんには、開發の田地もあるべきやと議せられしに、いかにもよろしかるべき由を申す。およそ黄金三千兩を費すべきにやとありしかば、豆州聞きて、我、此の處を領すとも、又いづかたに移りなんも知れず。我、三千兩の黄金を費して、ながく此の地の利あらんこと、且は公儀への奉公の一つなり」とて、安松に命じて多摩川の水を引かんとて、十六里ほど溝洫を穿ちて新河岸といふ

にいたりたり。

かくて水流れ入るかと待つに、更に水來らずして一



野火止の水用

年を経たりけり。豆  
州、安松を召して、「いか  
で水は入らざる」とあ  
りしに、「いかにも水は  
入るべきにて侍る。

なにさまにも故あり

と存ずといふ。「其の故いかに」とありしかど、いまだ其  
の由をば心得侍らず」と答へけり。又の年にも水入ら  
ず。また安松を召して尋ね問はれしかば、「さりとは

武藏野  
現東京府・埼  
玉縣附近一帯  
の平野  
川越  
市  
現埼玉縣川越

水は入るべきものに候へども、かくのみ侍ることかへ  
すがへす不審に候。但し、此の地は武藏野にて侍れば、  
およそ川越の城下の人家、常には疊の上に柿紙などを  
敷きて、客來ればそれを巻きて、さて請じ侍る。これは、  
地乾きて、しかも風常にあれば、忽ちに座中塵埃にうづ  
もれ侍るが故なり。然るに、今年は城下の塵埃むかし  
のやうに侍らず。殊に、武藏野に植ゑ侍りし畑物、今年  
ほどゆたかに候こと、つひに覺え侍らず。多摩川より  
此の溝に流れ入る水を、廣き野に引き侍る故に、いまだ  
流れ來るほどのことは侍らぬにや。此の水廣野にみ  
ちみちたらん後、かならず流れ來るべきものと存ず」と

答ふ。羽生又右衛門といふ代官こゝらをつかさどり  
ければ、やがて召し尋ねられしに、されば今年ほど野に  
植ゑしよろづのゆたかなることは覺え侍らず」と申せ  
しかば、豆州又のたまふこともなし。

又の年にも水來らず。此の時も、安松を召して尋ね  
られしかど、去年の如く答へければ、「汝が地の高下を審  
にせざるが故に、水流るゝに堪へざるにや」と怒られけ  
れど、驚く氣色もなし。

三年といふ秋、大雨のありける後、雷の鳴る如く、水音  
おびたゞしくとゞろきて、水此の溝にあふれみち、平地  
をも水行くばかりにて、六七寸ばかりある鮎の流れ來  
ぬ。  
ることおびたゞしく、たゞ一時に十六里がほどに流れ  
わたり、新河岸の川に流れ入りけり。さるほどに田地  
もひらけて、野火止二百石の地、忽ち二千石の地となり

ぬ。  
豆州、安松を召して、此の年頃、我、主の徳分に汝を責め  
たりけるに、つひに驚くことなく、重ねて溝を修せんと  
もせざりしこと神妙に覺ゆるものかな」とて、一倍の祿  
賜はりて二百五十石になされたり。其の後次第に經  
上りて、よき職をもつかさどれり。

(遺老物語)

遺老物語  
二十冊(寫本)  
逸事逸話集  
朝倉景衡編  
享保十八年  
(一三九三)成

橘南谿

名は春暉

國學者 醫師

伊勢國(三重

縣)の人

文化二年(二

四六五)歿

年五十三

中江藤樹

名は原

儒者

近江國(滋賀

縣)の人

慶安元年(二

三〇八)歿

年四十一

江州大溝

現滋賀縣高島

郡大溝町

小川村

現同郡青柳村

王陽明

尾州

尾張國

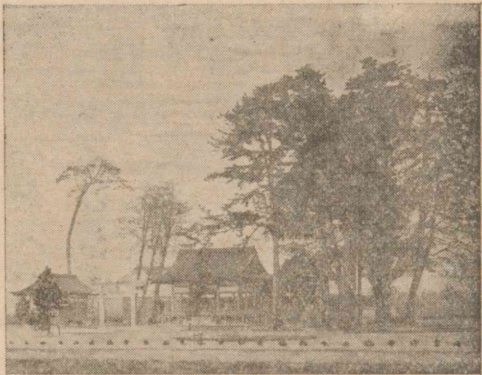
現愛知縣の内

三三 藤樹先生

橘 南 谿

中江藤樹先生は俗稱を與右衛門といひ、江州大溝の在、小川村の一農家に生まる。學は王陽明の流れを汲み、德行一世に高く、遠近その風を望まざるはなかりき。先年、尾州の一士人、用事ありて此の邊を過ぎ、先生の墓所小川村にありと聞きて、畑打つ農夫に尋ねしに、畑道なれば知れ申すまじ、案内し奉らんとて、先に立ちて行く。程なく小さき藁屋に到り、暫し待たせ給へ」とて内に入り、やがて出づるを見れば、木綿の新しき單衣に、布の小紋の羽織を著たり。彼の士人驚きて、さてく

丁寧なる男かな、墓だに教へ得さすれば満足なるにと  
思ひもて行くうち、墓所に到りぬ。



藤樹神社

彼の農夫竹垣の戸を開き、いざ入りて拜し給へ」といひて、其の身は戸外に拜伏せり。士人大いに驚き、さては、衣服を改め著せしは我が爲にはあらで、先生を敬するにてありけると心づき、さても汝は藤樹先生の御

家來筋の者にてやある」と問へば、さには候はず、されど此の村の者は、一人として先生の御恩を蒙らざるは無

熊澤蕃山  
名は伯禮  
通稱治郎八  
儒者

京都の人  
元祿四年(二  
三五)歿  
年七十三

加賀  
現石川縣の内

河原市  
現高島郡新儀  
村安井川川原

榎木の宿  
現滋賀縣滋賀  
郡和邇村の内

し。『親を敬ひ、子を親しむことを辨へ知りたるは先生の御蔭なれば、必ずおろそかに思ふべからず』と、我が父母も常々教へ候ひぬと語る。士人も初はたゞなほざりに一見の心にて來りしが、此の農夫の様子を見聞するに、今更に心もあらたまり、ねんごろに拜して歸りぬとなり。

熊澤蕃山は先生の門人なり。此の人藤樹先生に従はれし始を尋ぬるに、其の頃加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひ、榎木の宿に到りて泊る。馬方、河原市へ歸り、馬を洗はんと鞍を解きしに、鞍の下より財布一つ出でたり。取り上

げて見れば、金二百兩あり。馬方大いに驚き、今の飛脚の取忘れたるにこそと思へば、其のまゝ榎木に走り行き、飛脚の泊れる宿に到り、對面して委しく尋ね問ふに、相違なければ、其の金を取り出して返しけり。

飛脚は死したる者の蘇りたる心地して、喜のあまり、行李より別の金子十五兩を取り出して馬方に與へ、若し此の二百兩なくば、己が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に到らん。されば、その高恩、なかなか言葉の言ひ盡くすべきにあらねども、先づ當座の御禮までに贈り奉ると、涙を流し喜ぶに、馬方大いに驚きし顔色にて、そなたの金をそなたに取納め給ふに、何の

禮ごとといふことあるべきとて、手にだに取らず。色々  
にこしらへいへども、更に受けずして歸らんとする故  
やむことを得ず、十兩と減らし、五兩となし、三兩となし、  
段々減らして、終には金二分となし、せめてこればかり  
は我が心の喜なれば受け給ふべし。さなくては、我が  
心もすみ申さず、今宵も寐ねがたしと、理を盡くし詞を  
盡くしていふにぞ、此の金を受け申すほどならば、二百  
兩をも留め置き申すべし。かく返し申すからには、聊  
かにては謝禮を受くるは我が心にあらず。さりとして  
餘儀なく宣へば、さらば鳥目二百文を賜はるべし。こ  
れは今夜休むべき所を、これまで追ひかけ來れる賃錢

なり。これは我がとるべき錢なれば申し請くべし」と  
いひて、二百文にて酒を買ひ、其の家の人にふるまひ、我  
も酔ふほど飲みて歸らんとす。

飛脚も感に堪へかね、さるにても、そこはいかなる人  
にておはすぞと問ふに、名ある者にあらず、又何一つ知  
れる者にあらず。たゞ我が在所の近所に小川村とい  
ふ所あり。此の村に與右衛門といふ人おはして、夜毎  
に講釋といふことあり。某も折節行き、て聞き侍りし  
に、親には孝を盡くすべし。主人は大切にするものな  
り。人の物は取らぬものなり。無理非道は行ふべか  
らずなどいふこと、常々語り給ふにより、今日の金子も

我が物にあらざれば、取るべき理無しと心得しまでのことなり」といひすてて歸りぬ。

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さても此の度は辛き命生きのびて、各方にも對面することとなりぬ」とて、ありし次第を委しく語りけり。折節、其の家の裏に、熊澤治郎八、田舎よりのぼりゐて、學問修業の最中なりしが、此の物語を聞きて、其の人こそ眞の儒といふものなれ」とて、其の翌日すぐに江州に到り、小川村を尋ねて隨從を願はれしに、人に教へ申すべき程の學徳なし」とて、さらに許し給はず。熊澤ひたすらに願ひて二日が間、其の門に佇みて歸らず。先生の老母こ

れを氣の毒がり、とにかくに、先づ内へ入れ申せよ」とありし故、いなみがたくて内に入れ、遂に師弟の契約をせられけりとぞ。

其の後、先生を備前より招き給ひしに、其の身は病身なりとて固く辭し、門人に熊澤といふ者あり。御役にも立つべき者なり」とて、熊澤を出されけり。いづれも格別の事どもなり。

(東遊記)

備前  
備前國(岡山  
縣)岡山藩主  
當主池田光政

東遊記  
五卷  
遊行記  
寛政九年(二  
四五七)刊

橋本左内  
名は綱紀

號は景岳

幕末の先覺者

勤皇家

越前國(福井

縣)福井藩士

安政六年(二

五九)歿

年二十六

二三 立志

橋本左内

志とは心のゆく所にして、我が心の向かひ赴き候處をいふ。士に生まれて忠孝の心なき者はなし。忠孝の心これあり候て、我が君は御大事にて我が親は大切なるものと申すこと、聊かにても合點ゆき候へば、必ず我が身を愛重して、何とぞ我こそ弓馬文學の道に達し、古代の聖賢、君子、英雄、豪傑の如く相成り、君の御爲に働き、天下國家の御利益にも相成り候大業を起し、親の名までも揚げて、醉生夢死の者にはなるまじと、直ちに思ひつき候ものにて、これ即ち志の發する所なり。

志を立つるときは、此の心の向かふ所をきつと相定め、一度右の如く思ひ詰め候へば、彌切に其の向きを立て、常々其の心持を失はぬやうに持ちこたへ候ことにて候。凡そ志と申すは、書物にて大に發明致し候か、或は師友の講究に依り候か、或は自分患難憂苦に迫り候か、或は奮發激勵致し候かより、立ち定まり候ものにて、平生安樂無事に致し居り、心のたるみ居り候時に立つことはなし。志なき者は魂なき蟲に同じ。何時までたち候ても、丈の伸ぶることなし。志一度相立ち候へば、其の以後は日夜追々成長致し行き候ものにて、萌芽をもちたる草に膏壤を與へたるがごとし。古へより



俊傑の士と申し候人として、目四つ口二つこれあるにてはなし。皆其の志大なると逞しきとにより、終には天下に大名を揚げ候なり。世上の人多く碌々にて相果て候は、他に非ず、其の志太く逞しからぬ故なり。

志立ちたる者は、恰も江戸立を定めたる人の如し。

今朝一度御城下を踏み出し候へば、今晚は今莊、明夜は木の本と申すやうに、追々先へくと進み行くものに候。譬へば聖賢豪傑の地位は江戸の如し。今日聖賢豪傑に成らんものと志し候はば、明日、明後日と段々に其の聖賢豪傑に似合はざる處を取去り、如何程短才劣識の者にて、終には聖賢豪傑に到らぬと申す理は

御城下  
現福井市  
今莊  
現福井縣南條  
郡今庄村  
木の本  
現滋賀縣伊香  
郡木之本町

これなく候。恰も足弱き者にて、一度江戸行を極め候上は、終には江戸まで到著すると同じきことに候。

偕て、右様志を立て候には、物の筋多くなることを嫌ひ候。我が心を一道に取りきめ置き申し候は、は、戸締りなき家の番するごとく、盗人、犬など方々より忍び入り、とても我一人にて番は出来ぬものにて候。家の番人は随分傭人も出来候へども、心の番人は傭人出来申さず候。さすれば、自分の心を一筋に致し、守りよく致すべきことにて候。

とかく少年の中は、人々のなす事致す事に目が散り、心が迷ひ候て、人が詩を作れば詩、文を書けば文、武藝と

多岐亡羊の云々  
 都子曰、大道  
 以多岐亡羊、  
 學者以多方  
 喪生。  
 (列子)  
 啓發錄  
 一卷  
 立志五箇條の  
 自訓  
 嘉永元年(二  
 五〇八)成

ても、朋友に槍を精出す者あれば、我今日まで習ひゐた  
 る太刀業を止めて槍と申す様に成り度きものにて、こ  
 れは正覺を取らぬ第一の病根に候。故に、先づ我が知  
 識聊かにも開き候はば、篤と我が心に計り、我が向か  
 ふ所、爲す所を定め、其の上にて師に就き、友に謀り、我が  
 及ばず足らはぬ處を補ひ、其のきめ置きたる處に心を  
 定めて、多端に流れ、多岐亡羊の失なからんこと願はし  
 く候。凡て心の迷ふは、心の幾筋にも分かれ候處より  
 起り候ことにて、心の紛亂致し候は、我が志未だ一定せ  
 ぬ故に候。心定まらず、心收らずしては、聖賢豪傑には  
 成られぬものにて候。

(啓發錄)

野口博士

幼名清作、後  
 英世と改名  
 醫學博士  
 醫學博士  
 ドクトル・オ  
 ヴァイ・エン  
 ス  
 ロックフェラ  
 ー醫學研究所  
 正員  
 帝國學士院會  
 員  
 福島縣の人  
 昭和三年歿  
 年五十三

### 二四 野口博士の少年時代

貧しい中にも強い母の愛に包まれて、清作は健かに  
 生ひ立つた。しかし、清作が同じ年頃の子供等と無心  
 に遊ぶ様を見る度に、あゝ、あの手をどうしようと、母の  
 心は暗くなつた。

清作も成長するに随つて、自分の不具を覺つた。何  
 をするにも右手しか使へないことが、幼心にも悲しく  
 恥づかしかつた。そして自然その手を著物の間や帯  
 の下に隠さうと氣を配るやうになつた。が、心無い遊  
 仲間、清作が隠さうとすればする程、無理にもその手

首を見つけ出して嘲弄の種にした。清作は平素は温和な氣質であつたが、悪童共にからかはれる時は、さすがに堪へ切れなくなつて、奮然として子供等に飛びつき、胸ぐらを取り、喉首を締めようとするこゝろさへあつた。それでその場はをさまつても、後では悪童共のからかひが一層激しくなるばかりであつた。



野口英世

それを見る度に、母は人知れず涙を流した。そして、百姓の子で百姓の仕事さへ出来ぬ我が子のために、身

を粉に砕いても、學資を作つて學問を仕込んでやらねばならぬと堅く決心した。

清作は八歳の春、村の三和小學校に入學した。清作は好きな勉強をすることは喜んだが、こゝでも心ない級友等が、運動時間などにその不自由な手を嘲り辱しめるので、次第に學校に行くのをいとふやうになつた。そして、朝、學校へ行く風をして家を出て、遙か磐梯山の麓まで行つて時を過し、夕方になると、手や顔に墨を塗つて家に歸ることも度々であつた。然るに、母は終日我が子のために働いて、毎晩遅く、疲れ果てて歸るのである。清作はその姿を見て、せめて筆墨料だけでも

三和小學校  
福島縣耶麻郡  
翁島村に在つた

磐梯山  
同郡猪苗代湖  
の北に在る火  
山

自分の手で儲けて、母の手助をしようと思ひ立つた。そこで、彼は夕方、田の間を流れる小川に柳で編んだうづぼをかけて置いて、翌朝未明にそれを引上げ、その中に入つてゐる泥鰯をとつて、入用のありさうな家を尋ねて賣り歩いた。

母は清作の様子に心を痛め、或夜、清作を呼び、「お前は學問をして身を立てねばならぬ。そのためにわたしは辛い働もしてゐるのだ。泥鰯賣りをする暇に、なぜ勉強して偉い人になつてくれぬ」と涙ながらに言ひ聞かせた。「よし、勉強して偉い人にならう」と、彼本來の負けじ魂が目を覺した。以後、清作は一日も學校を休

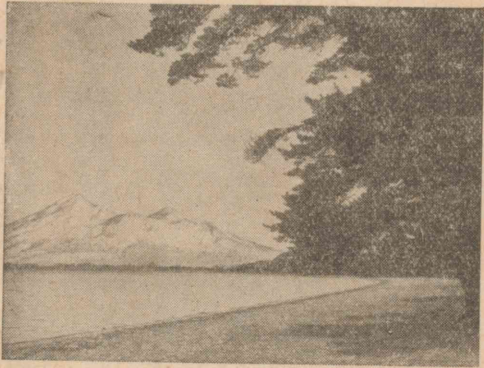
まずに、友達の嘲笑も風と聞き流して、一心不亂に學業を勵んだ。

清作の努力は學校の成績の上にもめきくと現れ、中等科五級の時には級長に拔擢せられ、更に尋常四年の時には、全校を通じての生長として、手不足な教師を手傳つて生徒を教へることになつた。そして、尋常科卒業の際は、成績拔群のため、特に縣廳から褒狀を授けられた。母の喜はいひやうもなかつた。

清作は尋常小學校卒業の際、試験委員として出張した猪苗代高等小學校の首席訓導小林榮氏に見出され、同氏の懇な懇進と助力によつて、猪苗代高等小學校

猪苗代高等小學校  
 耶麻郡猪苗代町に在つた  
 小林榮氏  
 教育家  
 猪苗代日新館の創設者  
 福島縣の人  
 昭和十五年歿  
 年八十一

に入學することになつた。時に年十四、明治二十二年四月のことであつた。



湖代苗猪と山梯磐

驚倒に値する事實であつた。

三城潟の清作の自宅から猪苗代町までは、往復三里

三城潟  
翁島村三ツ和  
三城潟  
猪苗代湖の北  
岸に在る

猪苗代湖  
福島縣の中部、  
磐梯山の南に  
在る

の道程である。殊に冬になると、強い磐梯山嵐の吹雪に捲きこまれたり、猪苗代湖から吹いて来る烈風に吹き飛ばされたりすることも珍しくはない。が、清作は、幼少から窮境に處して鍛へられて来た忍耐力と、天性の負けじ魂とを以て、雨の日も風の日も一日も缺席せずに通ひぬいた。

しかも、貧窮は、彼に通學以外の餘暇をその好きな勉學のために費すことを許さなかつた。母思ひの清作は、この頃となつては、如何にしても母の辛苦をよそに見てゐることが出来なくなつた。そして、不自由な手にもなし得られるだけ、農耕の手助や行商の品の手入

日本外史  
二十二卷  
源平二氏から  
徳川氏に至る  
武家時代史  
頼山陽著  
文政十年（二  
四八九）成  
十八史略  
二卷又は七卷  
史記以下宋鑑  
に至る十八史  
の事實を摘録  
した史書  
元の曾先之撰  
ナショナルリ  
ダー  
アメリカのパ  
インズ會社出  
版の初等英語  
讀本

をしようとした。又時には幼い弟の守をしたり、冬籠りの用意のため、山へ柴刈りに行つたりした。

その頃、小學校に於て最も生徒を苦しめたのは漢文であつたが、既に獨習で日本外史を通讀し、更に十八史略を讀んでゐた清作にとつては、むしろ易々たるものであつた。又、英語はナショナル第三リーダーまでをもつてこの學校の全課程としてゐたが、彼は既にその第四リーダーを讀破してゐたのみか、博物學の原書等をも繙いてゐた程で、語學には異數の上達を示してゐた。

しかし彼の最も好む所は理科で、物理、化學などの參

考書を涉獵して熱心に勉強してゐたので、教場内では、他の生徒のやうに筆記をすることなく、只一語も聞き洩らすまいと熱心に傾聽してゐるのみであつた。

この外に、彼の得意としてゐた學科は作文であつた。彼は暇ある毎に少年雜誌などを讀んで、想を纏め、文を練ることに努めてゐたので、作文に於ても彼に匹敵する者は級中に一人もなかつた。

かく生來の負けじ魂と非凡の精力とによつて、彼の學業は驚くべき進歩を示したが、如何ともしがたいのは、左手の不具であつた。人となつて以來十數年、これがあるがために、彼はいひがたい不便を忍び、耐へがたい

恨を呑んで來たのである。どうかして物を握れるやうになりたいといふ切なる思は、時として、いつそ小刀で指を一本々々切り離さうかと思ふまで彼を焦立たせた。

高等四年の第二學期半ばの、或作文の時間のことであつた。彼は日頃胸に餘つてゐた悲痛な心情を綴つて提出した。擔任の小林訓導がこのいたましい少年の告白を讀んだ時、同情の涙が漣々として紙面を打つた。つゞいてこれを讀んだ職員は一樣に同情の念に動かされて、衆議は忽ち清作の左手に手術を加へてやらうといふ問題にまで進んだ。この文は更に模範文

若松市  
福島縣若松市  
渡部鼎  
醫師  
陸軍二等軍醫  
正  
衆議院議員  
福島縣の人  
昭和七年歿  
年七十五

として同級生に示されたが、文中に流れてゐる限りない悲痛の情は同級生をも動かし、彼等は小林訓導の發議に應じて進んで醵金を申し出た。訓導は、職員生徒の同情の結晶たる十圓餘の金を以て、その頃米國から歸朝して若松市に開業してゐた開腹術の名醫、會陽醫院長渡部鼎氏の手術を受けさせた。その結果、清作の不具な左手も、僅かながら物を握る自由を得た。しかし、これが人類の恩人野口英世を世に送る一大機縁にならうとは、何人が思ひ設けたであらうか。

彼は、師友の温かい同情に感泣すると共に、今更の如く醫術の尊さが肝に銘じて、將來自ら醫者として立ち

たいといふ一念が炎の如く燃え上つて來た。そして高等小學校を卒業するや、渡部ドクトルに懇願して、書生として住みこませて貰ふことになつた。

清作は、醫院の用務の合間々々に、脇目もふらずに醫術前期試験の諸學科を勉強し始めた。そして、生來の強い氣根と、小學校時代から口癖となつてゐる三時間睡眠主義とをもつて、日夜を分かつたに勵んだ。院長が夜中の一時、二時頃、何かの序でにその室を覗いて見ると、彼がランプの光の下に、一心に醫書を読んでゐることは珍しくなかつた。

清作が會陽醫院に入つた翌年、日清の國交が斷絶し

翌年  
明治二十七年

て、院長は軍醫として召集された。院長は出征に先立ち、多くの門下生や書生に暇を出したが、年少且新參の清作を拔擢して、留守中の醫院一切の用務から、一家の會計まで之に委任した。

院長の留守中、患者の治療はしなかつたので、勉學の暇は十分あつた。清作はこの間に、醫學の研究はいふまでもなく、普通學の素養をも豊富にした。特に獨佛語の進歩は著しく、醫書は殆ど皆原書で讀んでゐた。

しかし、院長留守中の家事一切を處理するといふ委託任務は、まだ人情に疎い少年清作には重荷に過ぎて、その心勞は一通りではなかつた。家人の間に不和が



千里小學校  
 耶麻郡千里村  
 に在った

あつて、清作のなすことすべてが一部の人々からは悪意に解され、壓迫は日毎に募つた。清作は舊師小林校長——小林氏は當時千里小學校長になつてゐた——にその旨を認めて、辭職のことを相談したが、校長からは直ちにそれを不可とする旨の返事が來た。けれども、清作の身邊には、益露骨に排斥の手が加へられつゝある。清作は、更に再三書を寄せて、窮狀を恩師に訴へた。校長も彼の立場には内心同情を禁じ得なかつたものの、しかし一旦の過失は永久に消え難いものであることを思つて、嚴然として次のやうな意味の訓戒の手紙を寄せた。

數ある書生の中から、若齡の君に後事を託された院長の厚い信任に對しても、君はあくまでこの重任を果さねばならぬ。まして、院長は國家のために、一身を捧げて出征されてゐる。何の緣故もない者でも、出征軍人に對しては、後顧の憂のないやうにするのが、國民としての義務ではないか。先生が凱旋されるまで、一意、恩師御一家のために盡くせ。それはやがて自己を大ならしむる修養でもある。唯々誠意を以て勤めよ。

この手紙を手にした清作は、夢の醒めたやうに己の薄志を愧ぢ、以後あらゆる不快を忍んで、委託された使

命を果すために、自己の眞なり善なりと信ずる所を斷行した。

院長は、二年に亙る出征を終へて、明治二十九年の春若松に凱旋した。清作は託されてゐた留守中の家事一切をありのまゝに報告し、留守中克明に記帳して置いた。戦役中會計明細表を提出して査閲を乞うた。この明細表には、米屋八百屋の拂から、十五錢の草履、二錢の切手に至るまで、細大漏らさず英文で記載されてゐた。院長は、今更ながら、清作が一些事をも忽にしなない努力に感歎を禁じ得なかつた。

清作は、十八歳の初夏渡部氏の門に入つてから既に

四箇年、その間精根を盡くしてあらゆる學科の修得に勵んで來たが、就中醫學に於ては、已に醫術開業前期試験を受けるに十分な自信を持つやうになつてゐた。この上は一日も早く東京に出て斯學の蘊奥を極めたいといふ念慮を抑へることが出來ず、小林校長に宛て意中を残りなく認めて、東都遊學可否の意見を求めると、何事にも輕舉を厭ふ校長から、今は進んで遊學を贊成して來た。

清作は早速院長に東都遊學を願ひ出た。院長も快くこれを承諾して、種々將來を訓戒し、手厚い餞別を贈つてその門出を祝した。清作は受験準備の書類を背

越後街道  
福島縣安達郡  
本宮町から若  
湯市を経て新  
道

磐越西線  
東北本線と信  
越本線とを結  
ぶ郡山・新津  
兩驛間の鐵道  
東北本線  
上野・青森兩  
驛間の鐵道  
本宮驛  
東北本線二本  
松・日和田兩  
驛の間に在る

にし、希望にみちて、越後街道を東へ、六里に近い山道を、  
四年振りに我が家へと急いだ。

翌日、清作は知己、朋友に別れ、母と共に猪苗代の小林  
校長の宅へ別れを告げに行つた。清作の門出を祝ふ  
楽しい晚餐を終つてから、小林校長夫妻と清作母子と  
は、往時の追憶や清作の將來について、夜の更けるまで  
語り合つた。校長は十二圓の月俸から十圓を割いて  
餞別とした。

その頃はまだ磐越西線が開通してゐなかつたので、  
上京するには、東北本線の本宮驛まで、九里の山坂道を  
歩かねばならなかつた。翌朝ほの暗い上り框に清作

は草鞋の紐を結んで、恩師と慈母とに送られ、花稻の香  
の高い暖道の朝露を踏みつゝ、町外れまで來た。湖面  
は今や未來の世界的大學者の前途を祝ふものの如く  
朝日に輝き始めてゐる。清作は、幼い子を訓すやうに  
何くれとなく上京後の注意を與へる恩師と、名残を惜  
しんで一町、半町とついて來る慈母とに悲痛な別れを  
告げ、遠い前途を望みつゝ、初秋の碧空にそゝり立つ濃  
紫色の磐梯山を後にした。

(奥村鶴吉編野口英世)

吉村冬彦  
本名寺田寅彦

物理學者

隨筆家

理學博士

東京帝國大學

教授

帝國學士院會

員

東京市の人

昭和十年歿

年五十八

陸地測量部

參謀總長に隸

屬し陸地の測

量並びに兵要

及び一般國用

地圖の作製其

の他荒地に關

することを掌

る

東京市麴町區

永田町に在る

## 二五 科學的日本魂

吉村冬彦

「當世物は盡くし」で「安いもの」を列挙するとしたら、その筆頭にあげられるべきものの一つは、陸地測量部の地圖、中でも五萬分一地形圖などであらう。一枚の代價十三錢であるが、その一枚から我々が學べば學び得られる有用な知識は、到底金錢に換算することの出来ない程貴重なものである。

一枚の五萬分一圖葉は、緯度で十分、經度で十五分の地域に相當するので、その面積は、勿論緯度によつてちがふが、東京附近ではざつと四百二十方糎、臺灣では約

四百七十方糎、樺太では約三百五十方糎位に當る。

この一枚の地形圖を作る爲の實地作業に凡そどれだけの手數がかゝるか、と聞いて見ると、地形の種類により、又作業者の能力により色々ではあるが、ざつと三百日から四百日はかゝる。それに要する作業費が二三千圓であるが、地形圖の基礎になる三角測量の經費をも入れて勘定すると、一枚分約一萬圓位を使はなければならぬ。その他にまだ計算整理、製圖、製版等の作業費を費すことは勿論である。

それだけの手數のかゝつたものが、僅かにコピー一杯の代價で買へるのである。尤も物の價値は使ふ

人次第でどうにもなる。地圖を読むことを知らない人には、折角のこの地形圖も反古同様でなければ、何かの包紙になる位である。併し、地圖の言葉に習熟した人にとつては、一枚の圖葉は、實にありとあらゆる有用な知識の寶庫であり、もつとも忠實な助言者であり、相談相手である。

今假りに、地形圖の中の任意の一吋角をとつて、その中に盛り込まれたあらゆる知識を我等の「日本語」に翻譯しなければならぬとなつたら、それは大變である。等高線唯一本の曲折だけでも、それを筆に盡くすことは殆ど不可能であらう。それが、地圖の言葉で讀めば、

たゞ一目で土地の高低起伏、斜面の緩急等が明白な心像となつて出現するのみならず、大小道路の聯絡、山の樹立の模様、耕地の分布や種類の概念までも得られる。自分は、汽車旅行をするときは、いつでも二十萬分一と五萬分一との沿線地圖を用意して行く。遠方の山などは二十萬分一で悉く名前が分かり、附近の地形は五萬分一と車窓を流れる透視圖とを見較べて、かなり正確で詳細な心像が得られる。併し、もし地形圖なしでこれだけの概念を得ようとしたら、恐らく一生を放浪の旅に消耗しなければなるまい。

地形圖の價値はその正確さにある。昔ベルリン留

學中、彼の地の地理學教室に出入してゐた頃、一日ある教授が「面白いものを見せてやらう」といつて見せてくれたのは、某國某地の地形圖であつた。やはり二十米毎位の等高線を入れてあつたが、それが一見して、殆どいゝ加減な、出鱈目なものであるといふことが分かつた。等高線の屈曲・配布にはおのづからな法則があつて、いゝ加減なものゝと實測によつたものゝとは自然に見分けが出来るのである。

その時に痛切に感じたことは、日本の陸地測量部で地形圖製作に従事してゐる人達の、眞面目で、忠實で、物を誤魔化さない、頼もしい精神の有難さであつた。殆

ど人跡未到の山の中の、道のない所に道を求め、あらゆる危険を冒しても、一本の線にも偽を描かないやうにといふ、その科學的日本魂のおかげで、あの信用出来る地形圖が仕上るのである。さういふ辛酸を嘗めた文化の貢獻者が、どこの誰かといふことは、測量部員以外誰も知らない。

登山流行時代の今日、スポーツの立場から、嶮岨をきはめ、未到の地を探り得て、ジャーナリズムを賑はしたやうな場合でも、實は古い昔に名の知れない測量部員が、一度はそこらを縦横に歩き廻つたあとかも知れない。しかし、上には上がある。測量部員が眞に人跡未

到と思はれる深山を歩いてゐたら、鏽び朽ちた一本の錫杖を見付けたといふ話もあるさうである。

地形測量の基礎になる大事な作業は、所謂一等三角測量である。所謂基線が土臺になつて、その上に所謂一等三角點網を組み立てて行く、これが地圖の骨格となるべき鐵骨構造である。その網目の中に二等・三等の三角網を張り渡し、それに肉や皮となり造作となる地形を盛り込んで行くのである。この一等三角點にはみんな高い山の頂上が選ばれる。

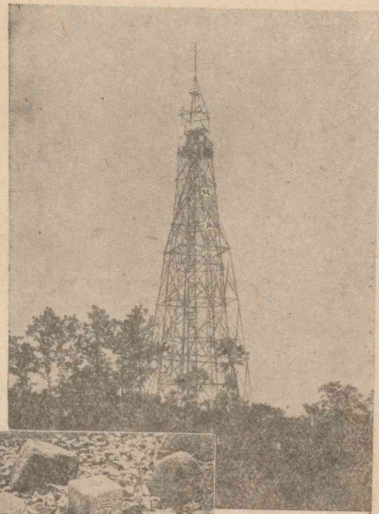
その理由は、各三角點から數十軒乃至百軒の距離にある隣接三角點への見通しが利かなければならない

からである。それだから、三角測量に従事する人達は、年が年中、普通の人は滅多に登らないやうな山の頂上ばかりを捜してあちらこちらと渡つて歩いてゐる。さうして天氣が悪くて相手の山頂三角點が見えなければ、幾日でもそれが見える迄待つてゐなければならぬ。關東震災後の復舊測量では、毛無山頂上で二十八日間頑張つて、天城山の頭を出すのを今か〜と待つてゐた人がある。古いレコードでは七十日といふのさへある。

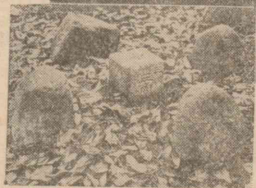
測量を始める前には、先づ第一に、三角點の位置を選定する選點作業が必要である。深山の峯から峯と一

關東震災  
大正十二年九  
月一日  
毛無山  
富士山の西、  
静岡・山梨兩  
縣に跨がる  
天城山  
静岡縣田方・  
賀茂兩郡に跨  
がる火山

つ一つ登つて行つては、そこから百軒以内の他の高峯との見通しを調べて歩くのである。一點を決定する



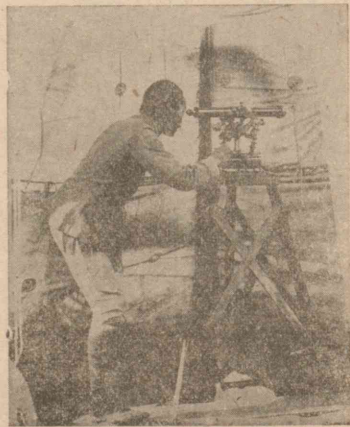
三角點と三角點標石



のに平均二週間はかかる。さうして三角點の配布が決定したら、次にはそこに櫓を組む造標作業がある。場所によつては、遠い

下の方から材木を引き上げなければならず、又見通しの邪魔になる樹木を伐らなければならぬ。これにも一點に約二週間はかゝる。

櫓が出来たら、少くも一年は放置して構造の狂を十分に落著かせてから、いよく観測にかゝる。一點における観測作業に、天氣がよくても二週間位はかゝる。技師一人、技手一人と、測量人夫六名乃至十名位の一行で、天幕生活をする。場所によつては、水汲みだけでも中々の大仕事である。食料は米、味噌、その外に若布、切干、鹽魚などは贅澤な方で、罐詰などは殆ど持たない。野菜類は現場で得られるものを利用する。樺太では、いろ／＼な植物を片端から試験



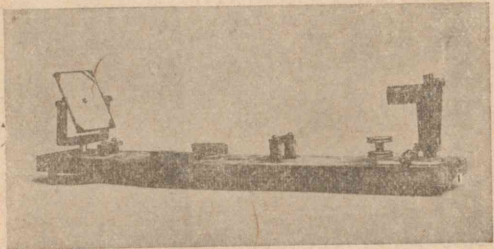
櫓の上の作業



的に食つて見た人もある。溪流で小魚を掴み取りにしたり、野獸を射止めて思はぬ珍味にありつくことも、折々はあるさうである。

北海道では熊におびやかされたり、食糧缺乏の難場で肝心の貯藏所を、この「山のをちさん」に掠奪されて、二三日絶食した人もある。道を求めて瀧壺に落ちて、危く助かつた人もある。暴風に天幕を飛ばされたり、落雷の爲に負傷したり、其の外、山崩れ洪水などの爲に、一度や二度死生の境に出入しない測量部員は少いさうである。それにも拘らず、技術官で生命をおとした人は殆どないといふのは、畢竟多年の経験による周到な

準備と注意によるものであらう。



ヘリオートロープ

技術官に隨行する測夫といふのが、又隠れた文化の貢献者である。唯一人、山頂の櫓に廻照器（ヘリオートロープ）を護つて、時々刻々に移動する太陽の光束を反射して、數十軒彼方の観測點に送る。それには、多年の修練によるデリケートな神経と筋肉の作用を要する。この測夫の熟練の如何によつて観測作業の進捗が支配されるのである。

或時向ふの山頂の廻照器がいつ迄待つても光を送

らない。信號をしても返事がない。行つて見ると櫓から落ちて死んでゐた。深山に唯一人だから行つて見る迄わからなかつたし、死因も全然不明であつたのである。

とにかく、これだけの艱難辛苦によつて一等三角網が完成される。これを基礎としてそれから二等・三等三角網が張り渡され、それを目標として局部々々の地形測量が仕上げられる迄のいきさつは、凡そ素人の想像に餘るものであらう。

地形測量をする測量班員が、深山幽谷をさまようて幾日も人間の匂をかゞずにもて、やつとどこかの三角

點の櫓にたどりつくくと、何となく嬉しさと懐かしさに胸を躍らすといふ話である。この一事だけでも、この仕事の生やさしいものでないことがわかるであらう。近年になつて、又日本の陸地測量部は一つの新しい方面で世界の學界に偉大な貢獻をするやうになつた。それは、同一地域の三角測量や精密水準測量を數年を隔てて繰返し、その前後の結果を比較することによつて、我等の生命を託する地殻の變動を詳しく探究することである。近著のアメリカ地理學會の雜誌の評論欄に、我が國の地球物理學者の仕事を紹介してあるその冒頭に、「地殻變動の測定に關しては、如何なる國民も

日本人に匹敵するものはない」と書いてある。  
 この重要な研究の基礎となる實測資料は、實に、悉く  
 我が陸地測量部員の汗血の結晶で出来たものである。

(寺田寅彦全集)

國語卷一終

(略名) 岩波編國語

昭和十二年六月三十日  
 昭和十二年七月四日  
 昭和十二年八月十八日  
 昭和十六年十一月十五日  
 印刷發行  
 訂正再版發行  
 新訂第一刷發行

國語 全十卷

定價各冊金五十五錢

編輯者

岩波編輯部

代表者 岩波茂雄

發行者

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地  
 中等學校教科書株式會社

代表者 山本慶治

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地  
 精興社印刷所

代表者 白井赫太郎  
 (東京四一)

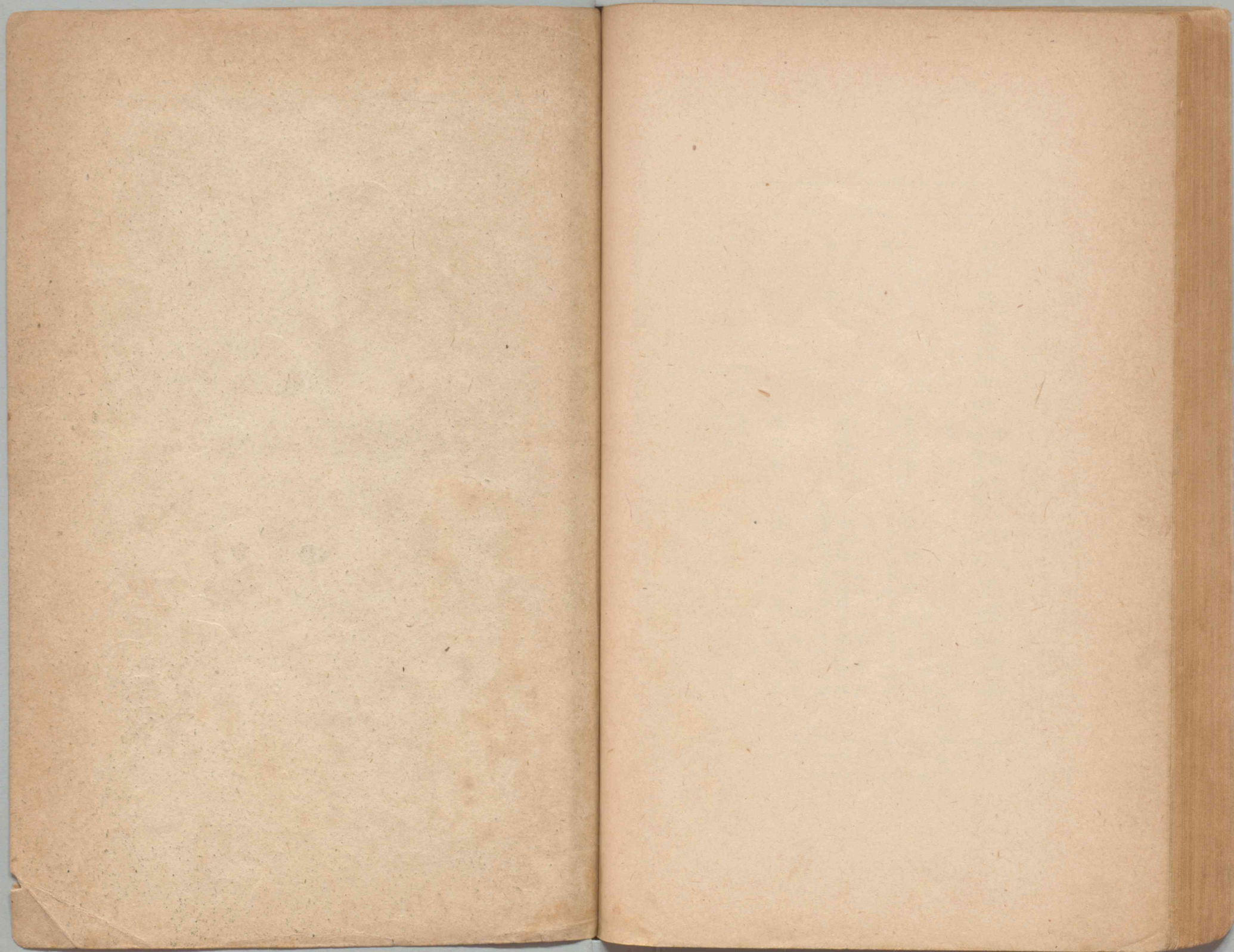
版權所有

發行所

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地  
 中等學校教科書株式會社  
 日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

3/2

配給元 日本出版配給株式會社  
 東京市神田區淡路町二ノ九



第一学年三册  
田

庫  
11  
47

広島大学図書  
2000302247  
